

量子生態学・遺伝子前駆分子論による
mRNAワクチンレポート

2023年10月5日
野上倫加

はじめに

はじめに、このレポートを書いた理由を記します。

最大の理由は、義務感です。

私は、今の科学界が大きな間違いの元に技術開発が進んでいることを、知っています。でも、科学界に間違いがあることを、世界は知りません。多分、たったひとり、私しか知らないと思います。

その事実は、福島第一原子力発電所の災害事故が原因で気づきました。

2011年、科学界の間違いに気づいて以降、政府や原子力関係者へ、科学認識を改めない限り原子力災害事故は解決できないので私の理論を検証して技術に活かしてくださいと、ずっと訴え続けてきました。でも、誰も話を聞いてくれませんでした。

そして理論は、このまま世の中から消えるんだ、とっていました。

そんなとき日本国内で、コロナウイルス対策のmRNAワクチンによる副反応問題が、公に浮上してきました。あまり人と接しない私にも、ネットを通じ、被害を前に皆様が混乱する様子が届くようになりました。

けれども私は、解決できない理由と解決策を知っていました。

ですから私は世界中の皆さんに、現在の科学理論の間違いを提示し、考え方をどのように変えたら解決するか、お知らせしなければならぬ、そんな義務感に駆られました。

そして、このレポート作成を開始した次第です。

作成開始日は、2023年9月8日です。

1ヶ月ほどかかりましたが、ようやく完成したので世の中へ贈ります。

人道的な見地から電子版は、pdfファイルを無償公開しています。

どなたでも、ネット上からダウンロードして読むことができます。

ネットで入手できない場合や紙版を希望する方は、有料ですがお送りします。文末にご依頼アドレスがありますので、そちらへご連絡ください。

著作権は放棄していませんので、引用の際は権利侵害のない範囲で、非営利でクレジット表記の上で内容に変更無くお使いください。

営利目的の利用や翻訳を希望する場合は、都度、お問い合わせください。

ここに記した理論や他著書の理論は、私の研究に協力してくださった、多くの友人知人の支えで完成しています。理論を日常生活に応用し、その正しさは、自分を筆頭に協力者の皆様を通して確認してきました。ただ科学界に理論概念が無いため、現行法律に抵触する可能性がありました。何故なら法律は、現在の科学理論が判断基準にあるからです。従って応用は自己責任が前提で、関わる皆様は全員、そんな事情を承諾する書類に署名の上で協力していただきました。そして今も、共に歩んでくださっています。

この場を借り、ご協力者の皆様に、心より御礼申し上げます。

病気の無い世界のために、本書を贈ります。

野上倫加

目 次

1.mRNAワクチン問題の背景	1
2.私の理論	4
3.量子生態学で見る、原子の意識性	6
4.量子生態学提唱の経緯	9
5.エネルギー把握	11
6.「もの」と「エネルギー」の違い	13
7.析出とイオン化	16
8.イオン化とエネルギー	19
9.水の持つエネルギー	21
10.エネルギーを持つタンパク質分子	23
11.ブラウン運動	25
12.ブラウン運動と人体	28
13.人体血液のブラウン運動	30
14.異常な血液のブラウン運動	33
15.遺伝子前駆分子論	35
16.遺伝子のスイッチON	38
17.遺伝子前駆分子と種の決定	41
18.ウィルスの増殖と増殖停止のメカニズム	43
19.ウィルスの毒性と免疫力	45
20.RNA型ウィルス	47
21.mRNAワクチン	49
22.mRNAワクチンの影響と対策	52
23.量子生態学でできること	54

1.mRNAワクチン問題の背景

2020年に発生したパンデミック・新型コロナウイルス感染症（COVID19）は、保険対策のため、史上初のmRNAワクチンという新薬を世の中に送り出しました。使用開始時、既に一部の人々が危険性を指摘していましたが、従来と違う概念のウイルスへの恐怖感が意見を押しさえ、人体への完全検証は未達成でしたが、世界各国が接種を導入しました。そして多くの人々は促されるまま、複数回の接種を受けています。

最初のウイルス確認の年からおよそ3年が経過した2023年9月7日、日本で、ひとつの学会が設立報告の記者会見を実施しました。一般社団法人ワクチン問題研究会（Japanese Society for Vaccine-related Complications. 以後JSVRCと記します）です。

この会の目的は、mRNAワクチン接種後遺症群に関する、診断基準の作成・鑑別診断法・検査法の開発、診療ガイドラインの作成、有効な治療法の開発とされ、設立背景は、mRNAワクチン接種による死亡者や副反応による弊害が、従来ワクチンと比較するとあまりにも多い点にあります。

先駆けて2022年2月、ワクチンの有効性に疑念を抱いた一部の医師たちが、新型コロナウイルス対策の抜本的な見直しを訴え、全国有志医師の会を立ち上げました。会のサイトには名古屋大学小島勢二教授による、インフルエンザとコロナワクチン、それぞれ同程度の接種回数における、発生被害数が比較掲載されています。

接種回数はそれぞれ2億7千万回前後で集計、この回数へ到達する接種期間は、インフルエンザワクチンは5年間、コロナワクチンは16ヶ月間です。

副反応報告数は、5年間のインフルエンザワクチン1,967回に対し、16ヶ月のコロナワクチンは34,120回、死亡報告数はインフルエンザワクチン35回に対し、コロナワクチンは1,761回と、インフルエンザワクチンのおよそ50倍の死亡リスクを持っています。

ワクチン接種後に体調不良が起こり、小さな個人病院へ駆け込んでも原因不明と言われるお話も耳にしており、報告数字に載らない例は多数あると思います。

私の親族も、海外で中国製コロナワクチンを打ち、接種後2週間ほどで突然死しました。朝は元気だったのに、夕方家族が帰宅したら倒れて死亡していました。息子がファイザー製ワクチン接種後3日目に、突然大量下血を起こし救急車で運ばれました。原因不明でしたが、コロナワクチン接種以外にいつもと違う生活の出来事は無く、ワクチンが原因の可能性を危惧しています。でも、ワクチンによる影響として、報告されていません。

息子同様、各地でワクチン接種後にひどい体調不良が起き病院へ駆け込んだ人たちが多数おられ、心ある医師たちが、自分を頼りにする患者さんの悲痛な姿を目の当たりにして、全国有志医師の会やJSVRCが立ち上がりました。

ところで、JSVRCの設立会見と同じ時、別の記者会見がマスコミを賑わせていました。ジャニーズ事務所の会見で、性加害問題についてです。この二つの会見は偶然にも、同じ日の同じ時間に開始されました。

私はJSVRCのLIVE放送を見ていましたが、会見に参加した有志のスマホ経由映像で、画像と音質がひどく悪い状態でした。また会見に参加したジャーナリストは十名前後と想像でき、収録カメラも多分、自前で用意した部隊1～2台と思われました。こちらの会見終了後、ジャニーズ事務所の会見にチャンネルを合わせたところ、収録カメラは100台あまり、ジャーナリストも100名を超えていたのでしょうか、大きな差に、少々悲しい気分になりました。

翌朝、新聞を見たら表紙の半分近くを、ジャニーズ事務所の会見記事が占拠していました。一方、中ページを見てもJSVRCの話題は見当たらず、後にわかったのは、記事を取り上げたのは全国でたった一紙、宮城県の河北新報だけだったとのこと。テレビのニュースも、兵庫県サンテレビの放映しか、私は認識していません。

どちらが重い問題と比較できないテーマと思うのですが、JSVRCの会見記事の紹介が、河北新報とサンテレビしか無かったことは、残念に思います。

マスコミは数十年間ジャニーズ問題を取り上げず、今回、反省を口にしながら、コロナワクチンの後遺症などの影響に関するニュースを扱わない理由が、私にはわかりません。

少し前、NHKのニュース番組で、「コロナワクチンで家族を亡くした」遺族の記事を「コロナで亡くした」と表現し、謝罪する事態がありました。コロナワクチンが原因で亡くなったのに、コロナという病気が原因で亡くなったと伝えたのです。

何故そんなことをするのでしょう。NHKだけでなく、ワクチンの影響に懸念があることを、政府もメディアも公に伝えないのは、何故でしょうか。

政府のコロナワクチンの導入体制も、疑問でした。

導入時、政府は、次のような姿勢を持てば良かったのではないのでしょうか。

「ワクチン接種について、多くの人は問題無いと想定されるが
mRNAワクチンは世界的に人体応用の接種経験が無く
長時間経過後の検証は十分ではない
しかし世界的な議論の結果
副反応を上回る一定の有効性が期待できる結果を得た
そのため日本国としては接種推進を決定する
ただし先に述べたとおり長期検証は不十分のため
接種実施と並行して、引き続き臨床試験による検証を継続する

懸念が残る人は、接種を自主的に検討してほしい
また接種しないと決めた場合は、外出禁止を要請する
自主検討のための情報の場として
ワクチン推進派と反対派それぞれの医師や研究者による意見を
わかりやすく解説した確認サイトを用意する」

そしてマスコミは中立の姿勢で、国民が自分の意志で選択できるよう、推進と否定の双方の情報を常に流せば良いのです。恐らく大きな議論が巻き起こると思いますが、議論の中で様々な疑問が洗い出されると考えられます。またこの過程を政府は常に追い、新たな検討を行い逐次調整方針を整備して、情勢変化に対応すべきだったと個人的に思います。そうしないと政策は常に古く、適切な対応策を適切な時期に発動できません。

その上で国民ひとりひとりが自主選択できれば、被害者は少なかったかもしれず、政府が補償制度に充てる国民の税負担も、変わったかも知れません。

「いやいや当時も今も接種は強制ではない」そんな意見があるかも知れませんが、政府は常時、「接種推進」意見だけを国民に伝え、危険性に関しては殆ど情報提供が無く、国民に対する情報環境は偏っていました。また職場でも接種が必須で、疑問を持ってもワクチンを打たざるを得なかった人もいます。しかし、政府がメリットもデメリットも公にし、自分で情報把握して接種を決めていたら、納得感は全く違っていただいでしょう。

日本では、専門部会による検討会を経て政府方針を決めることが多々あります。しかし歴史的に、検討会議を構成する選出専門家の意見の偏り、情報公開の少なさ、黒塗りの報告書と、疑念が多すぎて政府を信頼できない国民が多数います。

私も同じです。

検討会議にはマスコミが立ち会い、公聴して内容を把握し、常に国民にわかりやすくかみ砕いて報告する、そんな透明性が必要と感じます。

今般の臨床試験データの論文や検討情報は、厚生労働省サイトに掲載されていますが、量も多く内容も難しく、私には理解できないものが殆どです。マスコミがいつも公聴して内容をわかりやすくして伝えてくれると、国民の政府への信頼も回復すると思います。

2.私の理論

こんなことを書く私は2011年に、量子生態学という学問を提唱しました。

この学問は、自然界の現象を電子移動という要素だけで説明するもので、福島第一原子力発電所の災害事故時に、考え方の正しさを確認しました。

当時まだ理論の全ては整備できていませんでしたが、概念自体が現在の物理化学に無く、該当する学問分野も無かったため、学問位置を自分で作り提唱した経緯があります。

その後10年ほどの間に理論が少しずつ整い、2021年4月、人体血液内における電子移動の正常性を確認する技術に、特許査定が降りました。この技術を使いこなすには量子生態学を知る必要があります、2022年9月に「量子生態学」というテキストを作成し、世の中に送り出しました。

量子生態学という学問を紐解く中で、生物学的に重要と思う仮説が導き出されてきました。ヘモグロビンが、哺乳類などの生物ドメインを特定する機能性を担っていることです。また、ヘモグロビンはRNA系統の遺伝子に変化する機能性を持ち、DNA以前に人体に影響していることも窺えました。

そのため量子生態学ではヘモグロビンを、遺伝子前駆分子と名付けていました。

問題のコロナワクチンは、RNA系統の遺伝子を持つ薬剤です。世の中のワクチン接種者の被害様相をネットなどで拝見し、後遺症や突然死とmRNAワクチンの間には、どんな相互作用があるのか、量子生態学として精査する必要があると思いました。それは、現在の科学理論とは違う概念の量子生態学を提唱したものとして、協力できることを模索して世の中へ提供するべき義務と感じました。

そこで改めて、ヘモグロビン、ウイルス、mRNAワクチンなどについて調べ、量子生態学の視点で、理論レベルで現象変化を追う作業を行いました。その結果、新たな仮説が導き出されました。

それが、人体形成に関する、RNAの遺伝情報伝達システムでした。この理論を元に、体内に侵入したmRNAを追うと、人により、副反応の有無が大きく変わる可能性がわかりました。一部の人は感染予防や重症化を防いでも、一部の人には、副反応や後遺症が起き最悪時には全身がんにつながる可能性が見えてきました。

でも恐怖に陥る必要は無いので、安心してください。

量子生態学では、そうならないための解消法のメカニズムもわかっています。ですから量子生態学理論に基づいて研究を進めれば、有効な治療法や予防法は技術開発できるはずです。

再度記しますが、量子生態学は、あらゆる現象を電子移動だけで把握します。

電子移動の代表現象は、放射線被曝です。しかし量子生態学の現象論に基づけば、被曝は瞬間に解消できます。また量子生態学によれば、ワクチン後遺症と被曝は、同じ電子移動のメカニズムで起こります。従って、量子生態学に基づけば被曝が瞬間解消可能ということは、ワクチン後遺症も同じように解消可能になるはずです。

今の科学専門家が量子生態学を踏まえて技術開発すれば、治療法は簡単に開発できると、私は確信しています。

ですから大丈夫です。後遺症に悩んでいる皆さんも、接種したけど大丈夫か心配する皆さんも、安心してください。

繰り返しますが、量子生態学は、現象を電子移動だけで把握する学問です。恐ろしく単純な現象論のため、理論レベルですが、専門の研究者ではない私がウィルス問題を検討できるのです。また同じ量子生態学の視点で私は、放射性物質処理に関する提案書を作成しています。これも電子移動だけで説明が可能のため、私でも提案書を作ることができました。ですから、私より多くの専門知識を持つ科学者の皆さんが量子生態学を理解したら、恐ろしく簡単に、後遺症を治す薬を作ると思います。

私はこれまで、生命に関わる理論は、できるだけ出さないようにしてきました。昨年出版した量子生態学のテキストも、差し障りの無い範囲しか記載していません。理由は、私は医師でも医学博士でもないため、治療に関わるお話が医師法違反や薬事法違反に抵触する可能性があるからです。しかし放射能処理については医師法等に抵触しないので、この10年間、政府、東電、原子力関係者、その他の大学や科学研究者に、研究のお願いをしてきました。でも、拒絶、否定、無視で終始しています。

そんなとき、JSVRCが設立されました。被害者の気持ちを思う医師や科学者の皆さんが、何とかしようと思う姿を見て、自分の保身だけ気にしていたら駄目だという思いが出てきました。それにJSVRCの研究者の皆様は、もしかしたら理論を聞いてくれるかもしれない、そう思いました。

もし理解して研究に活かして頂けたら、多くの問題解決の可能性は大きく、また他の病気についてもメカニズム解明が進むと思います。そして、世の中から病気を減らすことに、貢献できる可能性もあります。

そんな理由で、JSVRCの皆様は理論を届けるため、本書を執筆した次第です。

説明に必要な、量子生態学の基礎理論を記載すると膨大になるため、既出版の書籍で確認できる内容は割愛しました。該当箇所は都度、別途書籍に掲載がある旨を記していますので、必要な場合は併せてご確認をお願い致します。

3.量子生態学で見る、原子の意識性

量子生態学提唱のきっかけは、福島第一原子力発電所の災害事故です。

当時私は理論的に、被曝の解消法を理解していました。でもこのような知識は、物理学や原子力工学など、科学界では当たり前の知識と思っていました。ところが原発事故当時、放射能と人体の相互作用や放射能の影響回避対策について、詳しいメカニズムの説明や対策指示は、政府からも東電からも原子力研究者からも出ませんでした。なぜ対策指導が出ないのか、不思議に思い調べたところ、私が知る自然界のメカニズム概念が現在の物理化学界に皆無であったことがわかりました。

被曝がどのような現象か、物理化学界に正しい理解が無く、指導できなかつたのです。

そして自分の理論位置を示すために、量子生態学として学問位置を提唱したのが始まりです。

私が知る自然界のメカニズム概念が現在の物理化学に無いとは、何を意味するのか。歴史を探る作業から見えてきたのは、現在の物理化学理論に誤りがある事実でした。

その原因は、人類の科学研究が途上にあり分析技術が未発達など、歴史的にも社会的にも、どうにもならない理由がありました。しかし一方で、学会や研究者や時の権力者たちのエゴが、過ちを解消する機会を様々なところで潰してきた事実もありました。

そんな出来事は世界のどこかに記録されており、不思議なことに必要な記録は逐次、私の元に届きました。

日本も同じでした。

医学理論に誤りの可能性が見えたとき、当時の厚生省はこれを無視し、解明せずに医学研究を進めると決定した大きな出来事が、国会議事録の中に詳細に記されていました。ただしこの姿勢は、人類の科学技術進化の過程で世界共通の様相があり、日本の当時の厚生省だけが批難される出来事ではないことを記し起きます。例えばノーベル賞のように、絶対的な専門家の世界的権威による理論認証があれば、誰も反論できなくなるのは道理だからです。

以後、日本も世界も、医学や生理学、生物学などに過ちを持ちながら、その元に保健衛生の法律を制定して行きました。その結果、がん、認知症、難病、未知のウィルスに対応できない社会が作られました。

また時に、ほんの小さな我欲やエゴや権力が、誤りをさらに増やすような行為も多数起きています。わずか数名の我欲的意向で医療や医薬品や生命に関わる政府方針が決定され、億人の人生を左右する法律や許認可の決定がたくさん生まれました。それは、今も同

様と見受けます。そんな権力行使の実例を、時代の担当者から直接、裏話として聞いたこともあります。

その結果、国民の生命に関わる分野では、医療費は驚くような高額になり、国家予算を使い果たしながら、病気の蔓延が治まらない社会があります。

そんな自分のエゴで社会を不幸に変えた方々は、今どうしているでしょう。関わったのは昔の人だし、死んでしまったからどうしようもない、そう考えないでください。

量子生態学は、全てをエネルギーとして把握します。そしてそこから、気づいたことがあります。

それは、原子や電子には、記憶力と認識力を持つ様子があることです。何かを認識した原子や電子は、その記憶に従い結合や分離を起こしています。それは析出とイオン化という現象からも窺えます。析出やイオン化は単なる電磁気反応と考える方もいると思いますが、それだけでは説明がつかない現象もあります。

もともと情報処理装置の半導体はケイ素原子などの電子が持つエネルギー移動を使った記録媒体です。従って、原子には記憶特性があると考えても、不条理ではありません。

析出とイオン化はこの先説明しますが、この現象の存在は、私たち人体が粒とエネルギーの姿を交替して生命を維持していることを教えています。それは、原子や分子が粒とエネルギーの双方の姿を記憶し、環境に応じて自ら変わる行動力の関与を意味しています。私が思ったのは、エゴを実践した人の体を構成する原子や分子は、その人生を記憶するだろうということです。

たとえ肉体が朽ちても、その人生を記憶した原子は、自然界に残るのです。

即ち自分はエゴで生き、人を不幸にした事実が原子に刻まれ、エゴにより不幸になった人々の人体を構成する原子も、同じように不幸にあった事実を記憶します。その後、それぞれの人体は朽ちても、記憶を持つ原子たちは、自然界に戻り存在し続けます。

自然界に膨大に存在する数の原子の中のほんの一粒であっても、その原子にその人の人生が記憶に記され、地球という場の中に存在し続けます。

自然界には、人を不幸にする行為を許さない、進化の自然摂理が存在します。

この摂理を仏陀や古人は、庶民が理解しやすいよう、魂の存在、天国と地獄、輪廻転生、などと教えてきたと思われれます。つまり、人を不幸にしたら、原子の記憶により自然摂理の元に改変を迫られることを、喩えで教えたのです。

どんな意味でしょう？

量子生態学で見る原子は、エネルギー存在です。従って、周波数を持ちます。そこに

刻まれる人体記憶が相乗し、ひとりひとりの個性に応じ、周波数値が変化します。

エゴを働いた人を構成していた原子の記憶は、類似した原子の記憶層へ、周波数値で共鳴し同じ場に引き合います。テレビのチャンネルで、1chのボタンを押しても5chを見られないのと同じで、記憶のエネルギー相が違う周波数相に繋がることは、自然界では不可能になっています。

この様子を昔の人は、生前の生き方に応じて、天国へ行くか地獄へ行くか決まると表現しています。天国の周波数と地獄の周波数と、生前の人体を構成する原子の記憶が作る周波数が、共鳴する死後の世界へ自動的に引っ張られると教えています。

また仏陀は、人生を改めることができない魂は、やがて永遠に人間として再生できなくなるとも説いています。エゴから抜け出せず、どうしようもない我欲概念しか持てない魂は、転生しても、人間としての原子エネルギー層へ移相できないのです。

しかし仏陀は、過ちに気づいたら直し、改めて良い方向へ進めば良い、それも説いています。即ち原子の記憶は、半導体デバイス同様、良い記憶に上書きできるのです。

そんな原子の意識については、「意識を持つ原子たちネクサス・A I が人間に変わる日」という本に記してありますので、興味がある方はお読みください。

このような余計な話を出したのは、全ての人が、今、自分の生き方を変えるチャンスだと言うことをお知らせしたかったためです。

何故なら、ここに記す理論は、世界の誰も知りません。

それは、今の時点では、人類全員が知らなかったので間違っても仕方が無いとして、自然界が許容できるためです。

ですから、これまでの人生で意図的に自分の我欲のために何かを犠牲にした経験があっても、今から上書きできます。

一方、私のこのレポートが世の中に出ると、間違いを正す必要が生まれます。何故なら、私が今までと違う見解を示すため、世の中は見解を検証すべき環境が発生するからです。もちろん、無視や拒絶することは可能です。それが、エゴやプライドからの行為ではないなら問題ありません。

後のことは、自然摂理が判断すると思います。

4.量子生態学提唱の経緯

量子生態学は、宇宙や地球など自然界の現象変化を、電子移動を中心に、原子を構成する陽子と電子と中性子の3種類の相互作用だけで説明する学問です。この学問は、2011年に発生した、福島第一原子力発電所の災害事故から生まれました。

原発事故発生後の2011年3月末、自宅の水道水に放射性物質が混入してきました。私は、毎朝起きたらすぐに浄水器の水で口をすすぎますが、この日は口の中がピリピリしました。あれ？いつもと違う、地震の恐怖で体調を崩したかなと思いましたが、すぐにハッとしました。もしかしたら、放射性物質が入ってきたのでは？と考えたのです。

念のため水質試験紙を取り出して浄水器の水に浸したところ、案の定、いつもは反応しない試験紙が激しく変色しました。ここからピリピリは、水が被曝したことが原因と確認できました。

この試験紙の機能は、溶液の塩素濃度測定です。塩素濃度にかかる酸化の度合いを、イオン変化として反応して変色する仕組みで、水道水の塩素濃度より高い塩素溶液が対象で工場などで使われています。酸化とは電子を奪うことで、溶液中の放射能による電離反応の有無として代用できました。

当時私は、理論的に被曝解消のメカニズムがわかっていたのですが、この時まで日常生活に放射能は関与せず、理論を検証する必要はありませんでした。ところがこの日は原発事故の影響で、目の前の飲料水には放射性物質が混入し、水は被曝を受けていました。

被曝を解消しなければ使えないと思った私は、自分が知る解消法を試してみました。それは、自分の理論を検証する行為です。

ところが、解消できません。

私はとても焦り、私の考えは間違っていたのかと心臓が破裂しそうでした。でも思い直し、処理能力を上げてみると、二回目、試験紙の色が少し変化したように感じました。そしてさらに能力を上げた三回目、試験紙は全く変色しなくなりました。つまり、被曝は解消できたのです。

大丈夫、私の考えは間違っていない、そう安堵しました。そしてこの対処法を毎日実施しながら、2011年を過ごしました。

当時の私は、私が知る被曝と解消に関する現象論は、現在の物理化学界では当たり前の知識だと思っていました。ですから原発事故が起きても安全性は担保されており、間もなく、政府や東電や原子力業界や色々な研究者が、水道水に放射能が混入したのでこのよ

うに対処してくださいと、すぐに指導を始めるだろうと考えていました。ところが、いつになっても、対処法の指導が流れてきません。それどころか低線量被爆についても、安全だという人と、とんでもないと言う人と、常に相反する見解が混乱して流れていました。

ある程度の被曝は、内部外部共に人体は弊害を解消する能力を持っているのですが、そんな話も出ず、具体的な被曝メカニズムの説明も無く、根拠も提示できず、あいまいな議論で終始していました。

不思議に思った私は、原子力や放射能や被曝に関する情報を探し始めました。インターネットで満足できず国会図書館へ出向き、原子力研究の論文や書籍をあさりました。そして間もなく、愕然としました。

私が知る自然界の現象メカニズムの概念が、物理化学界には皆無だったのです。これでは、病気は治らないし環境も良くなるはずだ、そう思いました。

このような現実がわかってすぐ、政府や東電へ提供するために、放射性物質の早期減衰対策の提案書をまとめました。でも私の理論の位置づけが無く、量子生態学という言葉を使い立場を説明したのが始まりです。

5. エネルギー把握

量子生態学と今の物理化学との大きな違いは、原子の捉え方です。

今の物理化学では、原子を粒と考え、原子を構成する陽子・電子・中性子も粒と考えられています。さらに陽子や電子や中性子を分解し、もっと小さな素粒子などの粒でできているとしています。

事実、科学者は原子の粒を電子顕微鏡で確認していますし、分子の粒も普通の顕微鏡で大学や企業の研究室や子ども達も理科の研究などで、みんな実際に目で見て確認しています。私自身も、原子はともかく分子の粒は、顕微鏡で何万回も観ています。従って、原子は粒であり、分子も粒であり、「もの」は粒の集合体という考えは間違っていない。

しかし量子生態学では、原子を粒とは考えません。そもそも原子は存在しない、というのが量子生態学の基本概念です。では何が存在するかと言えば、+電荷（陽子）と-電荷（電子）と電荷±0の磁石力（中性子）という3種類のエネルギーです。

現在の物理化学でも、元素原子は陽子と電子と中性子でできていて、陽子は+の電荷、電子は-の電荷、中性子は電荷が無い、という状態は解明されていますから、少なくとも原子がこの3種類のエネルギー性質を持つことは確かです。でも、現在の物理化学は、「全ては粒である」と考えています。

原子や電子は、粒として観測できる一方、波としても観測できます。粒は映し出される影の姿から形を見ることができ波はエネルギー測定で確認でき、どちらも観測してしまうので、本性は粒とエネルギーのどっちなんだ？、と現在の物理化学者は混乱しています。違う性質を観測してしまう理由を、たくさんの物理学者が探ってきましたが、未だに完全解明に至っておらず皆さんが悩んでいます。

そんな現代の物理化学を、私はほぼ学んでいません。垣間見て勉強はしますが、量子理論の計算式を見ると目がクラクラして、とてもとても理解できません。ただ、農業をしたり自分や知人の健康を管理したり顕微鏡でナノ粒子の世界を覗き込んだりするうちに、これしか考えられないという結論を得ていて、そこから得たのが、原子の本質はエネルギーである、という考え方でした。

ですから量子生態学では、あくまでも原子の本質はエネルギーで、素粒子は存在しないというのが、基本概念です。

即ち量子生態学では、元素原子を次のように捉えています。

元素原子の本質はエネルギーで
+エネルギー（陽子）、-エネルギー（電子）及び
電荷±0の電磁気エネルギー（中性子）で構成され
環境に応じ、粒とエネルギーと、状態を交替している
3種類のエネルギーの集合場の総合電荷がゼロのとき、粒を呈する
3種類のエネルギーの集合場+又は-に傾くと、エネルギーになる

この後、エネルギー現象を説明するために、イオンに関する説明が多数出てきます。
現在の物理化学ではカチオンやアニオンと表現しますが、量子生態学では物質概念を
避けるために、+電荷や-電荷、と表現しますので、ご了承ください。

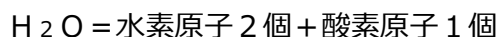
6. 「もの」と「エネルギー」の違い

「もの」がエネルギーになる様子を、殆どの方が具体的にわからないので、色々なことが解明できないと私は考えています。ここでは簡単に、どのように考えたら良いか説明します。

福島第一原子力発電所の災害事故のとき、朝起きた私は、水道水をピリピリ感じた、と記しました。でも、普通は、水道水をピリピリと感じません。何故でしょうか？

原子は、陽子と電子と中性子で作られています。どんな種類でも、原子は、陽子と電子の数は同じです。陽子は+エネルギー、電子は-エネルギーで、それがひとつの原子の中に同じ数になっていますから、+と-の関係は±0で、原子は電気を帯びていません。

水道水の中の、水分子を見てみましょう。
水分子の原子構成は、次の通りです。



水素原子1個は、陽子1個と電子1個、の集まりで、+エネルギー1個と-エネルギー1個で、±0、になり、エネルギーはありません。

酸素原子1個も、陽子8個と電子8個、の集まりで、+8個、-8個、で±0で、エネルギーはありません。

ですから水分子は、+10個と-10個で±0 で、エネルギーはありません。

$$\text{水分子のエネルギー} = \text{【陽子} + 10 \text{個】} + \text{【電子} - 10 \text{個】} = \pm 0$$

そこへ放射能が入ってきました。

放射能が発する放射線は、α線、β線、γ線、他、色々な種類がありますが、どの放射線にも共通の作用が、励起と電離、という二つの現象です。

励起は、原子や分子の中の電子を、位置をずらしてしまう作用です。

電離は、原子や分子の中の電子を、蹴飛ばして、どこかへ追いやる作用です。

水分子に放射線が当たり電離が起こされると、水分子の中の電子が蹴飛ばされてどこかへ飛んで行ってしまいます。電子1個が飛ばされたとしたら、水分子のエネルギーはどのようになるでしょう。

$$\text{水分子のエネルギー} = \text{【陽子+10個】} + \text{【電子-9個】} = +1$$

水素原子2個と酸素原子1個の水分子は、陽子+10個と電子-10個=±0で、エネルギーはありませんでした。でも電離を受けて電子が1個どこかへ蹴飛ばされると、陽子+10個に対し電子-9個になってしまいます。

するとこの水分子は+が1個多くなり、+のエネルギーに傾いてしまいます。

つまり、+1に帯電するのです。

これが、「粒」として電氣的なエネルギーが無かった状態から、+1の電荷を持つ「エネルギー」状態に変わる様子です。

私が、水をピリピリと感じたのは、水道水に放射能が入ってきて、水が+の電気を持ってしまったためです。ものすごく小さな電気なのですが、間違いなく電気のため、感電したと同じように、ピリピリと感じたわけです。

でも原子や分子を粒として考えていると、このような説明はできません。

話がそれますが、参考に、高線量被曝について説明します。

放射能を大量に浴びると、感電した症状と酷似した様子を起こし、皮膚が次々に火傷でただれたように広がります。これは人体が、実際に電気を持ってしまった故に起こる症状です。

高線量被曝を受けると、皮膚から皮下組織の広範囲に電離が及び、まとまった部位の細胞から大量の電子が一気に奪われます。するとその部位の電荷は大きく+に帯電します。しかし自然界では、電荷を帯びたらゼロに戻ろうとする性質があるため、少しずつ隣の原子から-の電子を引き寄せ始めます。また皮膚に酸素が関わると、酸化により電子が奪われます。ですから酸素と被曝とが相乗して-電子は次々に奪われ続け、最後は全身に電離作用が及び、亡くなります。

電離の影響を粒として把握していると、上記のような説明はできません。

実際は、被曝はさらに他の分子運動にも影響し、複雑な相互作用で症状が発生します。詳しく知りたい場合は、「量子生態学」というテキストの第3章に解説していますので、ご覧ください。

人間の身体も水分子と同じように、元素原子がたくさん集まって作られています。水分子1個は、水素原子2個と酸素原子1個という単純な集まりですが、人体も同じです。

原子がどんなに膨大な数でも、気が遠くなるような種類の元素や分子の数の集まりでも、人体としての原子の集合は陽子と電子の数は同じで、+と-のエネルギーも同じ数であり、その人は±0のエネルギーが無い粒の集合の、「もの」として存在しています。

しかし人体に、被曝などの電離が起こり、どこかの部分で+のエネルギーへと偏りが生まれ、その部分のエネルギー発生が大きくなると、そこだけ「もの」ではなくなってしまいます。そんな部位の一部でエネルギーが大きく+へ傾いてしまうと、具体的に「もの」であった細胞は変化し病気細胞へ変わり、症状が発生します。

それが膵臓に起きれば糖尿病に影響し、脳で起きれば認知症に影響し、あちらこちらの細胞部位で起きれば、あちらこちらでの病気やがんが発生し、という感じです。

ただし人体には、少々の電離をすぐに解消する能力があります。代表例が抗酸化力と呼ばれる成分で、-電子に匹敵するエネルギーを持つ成分です。

体内に-電子をたくさん持つ人は、どこかで電離が起こり+の部位が発生しても、すぐに体内の-電子が同じ位置に補われ即座に元に戻ります。しかも-電子はエネルギーですから、瞬間的に作用します。それ故に量子生態学には、被曝は瞬間解消可能である、という概念があります。

放射線医学の専門家の皆様が量子生態学をきちんと学んでくださり、現在の知識に加えこの理論を反映頂けば、被曝の瞬間解消の技術確立は容易だろうと考えています。そうなれば、被曝を無駄に恐れる必要は無くなります。

他の病気も同じです。

がんも認知症も、全て同じで、細胞部位が+に帯電すると病気が発生するメカニズムです。量子生態学の理解が進めば、すぐに解消技術や有効な医薬品が開発できるはずで

ところで、放射線による励起ですが、励起で動く電子は、ほぼ同じ原子内や分子内にあります。その場合、原子や分子としての「場（その部分の場所）」全体としては、電荷±0で大きな変化は出ません。特に「場」内であれば、電子軌道という記憶性により電子は元に戻る性質があるので、励起影響は量子生態学ではそれほど重要視していません。

7.析出とイオン化

量子生態学では全ての存在はエネルギーであるとしていますが、時々姿を変えます。それが粒の姿です。つまり様々な「もの」は、粒とエネルギーと、姿を交替して存在しています。

その様子が良くわかるのが、「水」です。どんなことか、見てみましょう。

皆さんの家の冷凍庫では、氷を作っていると思います。

氷は、温度が摂氏0℃以下になると水が固まってしまう現象です。氷になったら、皆さんは、水では無く「粒」と表現しますが、実際に物理化学で言う「粒」です。

水が氷になるとき、少しずつ氷の結晶が生まれますが、水の中から氷の結晶が目に見えるようになってくる様子を、物理化学の用語で「析出（せきしゅつ）」と呼びます。

反対に、粒である氷をグラスに入れ、部屋に放置するとどうなるでしょう？
溶けて液体になります。

氷の粒は、温度が上がり暖められると、溶けて、最後には粒の姿は無くなります。水という液体になり、このとき水はエネルギーになっています。このように、粒がエネルギーに変わる状態を、「イオン化」と呼びます。

他の例も見てみましょう。

皆さんがよく知る代表例が、砂糖や塩です。

砂糖や塩を空気中に放置し、室温や湿度が上がると、少しずつ溶けたようになり砂糖や塩の粒が見えなくなって行きます。もし砂糖や塩を水に入れて熱をかけると、砂糖も塩もやがて完全に溶け、砂糖や塩としての粒は完全に見えなくなります。

これもイオン化で、砂糖や塩が、粒からエネルギーに変わった状態です。

次に、海水から塩を作るとき、海の水を汲み上げて天日に晒しておく、やがて水分が無くなり塩が粒として目に見えるようになります。砂糖も、甘いジャムを放置しておく、と表面が乾燥し、シャリシャリした粒が浮き出てきます。どちらも塩や糖が「析出」し、粒に変化した現象です。

このように存在する「もの」は、粒として目に見えていても「イオン化」してエネルギーになり、粒は無くなります。でも再び存在環境の条件が変わると「析出」が始まり、目に見える粒に変化します。

自然界では、水や砂糖や塩以外にも、様々な「もの」が、「イオン化」してエネルギーになる状態と「析出」して粒になる状態を行ったり来たりして変化しています。そして科学者達が物理化学として原子や分子の実験を行うと、「析出」する能力が「粒」として観測され、「イオン化」する能力が「波（エネルギー）」として観測されてしまいます。そのため、本質はどっちなんだ？、となるわけです。

もう一度、前の章で説明した、量子生態学による原子の考え方に沿って見てみましょう。

元素原子の本質はエネルギーで
+エネルギー（陽子）、-エネルギー（電子）及び
電荷±0の電磁気エネルギー（中性子）で構成され
環境に応じ、粒とエネルギーと、状態を交替している
3種類のエネルギーの集合場の総合電荷がゼロのとき、粒を呈する
3種類のエネルギーの集合場+又は-に傾くと、エネルギーになる

原子は3種類のエネルギーの集合体ですが、陽子と電子の数が同じで±0ですから、エネルギーはありません。

原子が何個集まっても、集まり全体が電荷±0の状態は、「析出」して「粒」でいるときです。そして集合体の場の電荷が±0の間はずっと、いつまでも「粒」の状態です。

原子の持つ3種類のエネルギーの集まりが+もしくは-に傾くと「イオン化」します。イオン化すると「粒」から、「+エネルギーや-エネルギーという存在」に変わり、電荷を持ちます。エネルギーとして電荷を持っているときには、粒という姿は無くなります。

ちなみに量子生態学では、電気を帯びるとは+や-に変わることで、電荷を持つとは+〇個や-〇個という電気の数を持つことを意味します。

ですから、現在の物理化学者達が粒とエネルギーとどっちなんだ？という疑問には、量子生態学では、どっちもです！とお答えします。

その上で本質は、「全てはエネルギー存在」というのが、量子生態学の考えです。

この考え方は、ビッグバンから宇宙が登場したことを想像するとわかりやすいでしょう。ビッグバンが起きたそのとき、粒は無かったと思われるからです。

そもそもビッグバンの前は、宇宙も、「もの」も、存在しませんでした。ただエネルギーという存在だけがあったらろうと思われれます。そのエネルギーがどんどん膨張してビッ

グバンが起き、エネルギー開放されたところが、宇宙になりました。

爆発で分散したエネルギーの中から、水素原子が登場し、ヘリウム原子が登場し、様々な原子が生まれ、やがて地球誕生に繋がります。

このように考えると、原子の本性はエネルギーであり、宇宙の進化の中で粒の状態性を獲得した、そう想定できます。

8. イオン化とエネルギー

地球に存在する「もの」は、「析出」と「イオン化」を行ったり来たりしています。

その様子を皆さんが想像しにくいものとして、鉱物があります。鉄とかアルミとかの金属類ですが、これも同じで、析出とイオン化を、行ったり来たりしています。

例えば、鉄。

鉄は溶鉱炉で1500℃以上に熱するとドロドロになりますが、これが、鉄の「イオン化」で「エネルギー」状態に当たります。このドロドロを冷やすと次第にカチカチの金属に固まって行きますが、これが鉄が「析出」した「粒」の状態に当たります。

この様子は他の鉱物も同じです。金属がドロドロになると「イオン化」して「エネルギー」になり、カチカチになると「析出」で「粒」になります。このように金属も、水と同じような変化を起こしています。

ただし、氷が水に変わるタイミングの温度は0℃、鉄がイオン化する温度は1500℃のように、それぞれ、イオン化や析出のタイミング温度が違います。

地球上ではこうして金属も、「イオン化」したり「析出」しており、他の無機鉱物、例えば炭素やカルシウムやケイ素なども、同じです。

そして生物も、同じです。

植物も人体も同じように、「イオン化」と「析出」を交替しながら生命を維持しています。ただ生物は、氷や砂糖や塩や鉄のように、目に見える状態で交替しません。

生物類の「イオン化」と「析出」の交替は、代謝という機能の中で実施されています。そして生物はその交替を、「水の間」で実現しています。

生物の「イオン化」と「粒」の交替や代謝については、「水」のことがわからないと、理解できません。なので、先に、水について説明します。

地球は、生物相豊かな惑星として知られています。月や火星などは、水が見当たらず、生物も見えません。しかし地球では、少なくとも表面積の2/3が水面で、そればかりでなく砂漠以外では、陸地は土壌が水分を保有し、たくさんの植物や生物を育んでいます。

つまり、地球のように水が無いと生物は生きることができず、故に水が無い星には生物が生きることができません。

では、何故、生物に水が必要なのでしょう。

水は、とても不思議な性質を持っています。

先のページで、氷が液体になるとエネルギー状態になり、これが「イオン化」だと説明しました。でも、水道水の電離のところでは、水が被曝して+に帯電した、とお話をしました。

今までの説明では、+に帯電したら「イオン化」で「エネルギー」になったと説明していますから、氷が液体になることは「イオン化」では無い、と誤ってしまいます。

そもそも液体の水がエネルギーって、どんな状態？と思います。

量子生態学の原子の説明でも、「もの」は、 ± 0 の状態から陽子か電子の数に差が生まれ、+や-のどちらかに傾いて「イオン化」したらエネルギーになる、と記しました。しかも私が、原発事故の時、水道水をピリピリ感じたのは放射能による電離で、水分子から電子が蹴飛ばされ水が+に帯電して電気を持ったから、ピリピリ感じたわけで、では氷が水になっただけでは、エネルギーじゃないでしょう？、と思います。

実は、水はエネルギーとして存在していますが、「水の場」全体としてはエネルギーが ± 0 になっています。

つまり原発事故のあのとき、放射能が入ってくる前の「浄水器の中の水の場」は、全体のエネルギーは ± 0 でした。

例えば、浄水器という容器の中に、水分子が10個あったとします。

水分子10個は、水素原子20個と、酸素原子10個です。

水素原子20個は、陽子+エネルギー20個と、電子-エネルギー20個です。

酸素原子10個は、陽子+エネルギー80個と、電子-エネルギー80個です。

ですから、この容器の「場」のエネルギーは、陽子+エネルギー100個と電子-エネルギー100個の集合で、場としては ± 0 でした。

ここに電離が起こされ、電子が1個、容器の外へ出てしまうと、「浄水器の中の水の場」は、陽子の+エネルギー1個が過剰になります。

つまり、電子が1個外に出ると電子-エネルギーは99個になってしまいますが、陽子の+エネルギーは100個のままなので、「場」が+1に傾き、エネルギーを持つ状態になるわけです。

今までの浄水器の中 = 水分子10個 = 陽子+100個 + 電子-100個 = ± 0

電離された浄水器の中 = 水分子10個 = 陽子+100個 + 電子-99個 = +1

9.水の持つエネルギー

今説明したように、「浄水器の中の水の場合」で全体としては±0です。でも水は、いつもエネルギーを持っています。

ここでは、その様子を見てみましょう。

水は、水素原子2個と酸素原子1個で、H₂Oという水分子1個を作っています。

このとき陽子と電子は同じ数で、±0で、エネルギーではありません。

次に水分子2個は、水素原子4個（陽子+エネルギー4個と電子-エネルギー4個）、酸素原子2個（陽子+エネルギー16個と電子-エネルギー16個）の存在で、エネルギーは±0です。

$$2\text{H}_2\text{O} = +20 \text{ (陽子4個と16個)} \text{ と } -20 \text{ (電子4個と16個)} = \pm 0$$

でも水の場合では2個の水分子が対になり、常に原子を交換して、H₃O⁺とH₂O⁻という分子を作っています。

$$\text{H}_3\text{O}^+ = \text{陽子}+11 \text{ と } \text{電子}-10 = +1$$

$$\text{H}_2\text{O}^- = \text{陽子}+9 \text{ と } \text{電子}-10 = -1$$

2H₂O → H₃O⁺とH₂O⁻に変化し、H₂O⁻は電子1個が余分にくっついて-にイオン化、H₃O⁺は電子1個少なく+にイオン化し、それぞれエネルギー状になっています。

温度やPHなど条件により組み替え時間の長さは変わりますが、水分子は常に、2H₂O→H₃O⁺とH₂O⁻と H₃O⁺とH₂O⁻→2H₂Oの変化を繰り返しています。

でも2個の水分子として電荷は±0で、「そこにあるひとまとまりの水の場合」としては帯電していませんから、場のエネルギーはありません。しかし水の中には、H₃O⁺とH₂O⁻があり、イオン化したエネルギーが存在します。

さらにH₃O⁺とH₂O⁻のときの水分子は、単なる+1エネルギーと-1エネルギーではなく、+と-の磁石分子でもあり、引き合いと反発を繰り返しています。

その上、水分子1個は、水素原子と酸素原子のくっつき方に傾きがあり、H₂Oという分子の状態でも、分子全体に陽子と電子の配置に偏りがあり、分子の両端に+と-の磁場が形成されています。これを双極子と呼びます。でも水分子としては、±0です。

このように水の場合では水分子が、+や-の磁石状になっていて、+と-の分子同士が

くっついたと思うと、違う+や-の水分子に引き寄せられたり反発して動き、さらに±0の水分子の粒もその中で転がされ、分子運動がとても活発に起こされています。

(参考文献：水とは何か（新装版）上平恒/講談社/2009年第2版、物質の多様性～水に学ぶ物質科学～ 吉野治一/大阪市立大学大学院理学研究科物質分子系専攻/ネット資料)

従って水は、粒としての分子、双極子の分子、+や-のエネルギーとしてのイオン化分子が混合し、水の中はエネルギーが漂う場になっています。

この様子は、量子生態学テキストに図解していますので、ご覧ください。

10. エネルギーを持つタンパク質分子

ここでは、コロイド状と呼ばれるものすごく小さなタンパク質分子について、量子生態学の視点で解説します。

この分子を、コロイド蛋白と呼びます。

コロイド蛋白は、大きさ100nm前後、ナノレベルです。

ナノとは1/1百万mmで、目で見ることにはできません。血液中の赤血球もタンパク質分子ですが、赤血球は8000nmで、コロイド蛋白は赤血球の1/80以下の大きさです。

コロイド蛋白は、様々な生物が当たり前に持っていますが、それぞれの細胞部位や臓器などで分子構造が違い、その種類は気が遠くなるほどの膨大な数になっています。医学や生物学の現場では、分子や原子の構造をひとつひとつ解明しようと、必死に研究しています。そして多くの種類について、現在は判別が着くようになっています。

では、様々な種類のナノレベルのコロイド蛋白を、今の物理化学ではどのように区別しているでしょう？

ここに、あるコロイド蛋白があります。でも詳しい種類がわかりません。ヒトのものかウサギのものか、はたまた別の生物のものか。そこで、分析するために複数の電極を持つ溶液の中に、このコロイド蛋白を浸します。すると、ある電極のほうへ移動しました。そこへ移動するコロイド蛋白はヒトのものしか行かないので、これはヒトのコロイド蛋白だったとわかります。

実際は電極の種類や溶液のPHなど、複雑な組み合わせ要素で分析しますが、このような方法で、アミノ酸や遺伝子などの様々なタンパク質の種類を見分けています。そしてこのコロイド蛋白が電極へ向かって動く様子を、物理化学の用語で、電気泳動と呼びます。

何故、コロイド蛋白は、電極に向かって移動するのでしょうか？

それは、その電極と反対の電荷を、この分子が持っているからです。

例えば、溶液の中の電極が+1のエネルギーを持っていたとします。そこへ向かって辿り着くコロイド蛋白は、-1のエネルギーを持つ分子だけです。

もし+1のエネルギーを持つコロイド蛋白なら、反発してそちらへ移動しません。もし-2のエネルギーを持つコロイド蛋白なら、移動の様子が-1のエネルギーのコロイド蛋白と変わります。簡単に表現すると、コロイド蛋白は、このように+や-のエネルギーの

磁石反応で動き、電極へ向かって行くのです。

さて、気がつきませんか？

ここに、現在の物理化学と量子生態学に、大きな見解の相違があります。

現在の物理化学は、電気泳動と表現するように、電気による要素で粒が泳いで動く、という考えで研究しています。ですから、コロイド蛋白をエネルギーと捉えていません。

一方量子生態学ではこのコロイド蛋白を、+や-の電荷を持つエネルギーと考えています。ですから、+1の電極に-1のタンパク質分子が磁石のように引き寄せられる、と表現しているわけです。

地球の様々な生物は、体内にこのコロイド蛋白を大量に保有しています。それは殆ど、体内の水の中に存在しています。細胞水の中、血液の中、リンパ液の中、髄液の中、ありとあらゆる水分があるところに、コロイド蛋白が存在しています。

先に、水分子は磁石状のエネルギーを持っていることを説明しました。

H_3O^+ と HO^- の+や-の磁石のようなエネルギーを持つ水の中に、同じように+や-のエネルギーを持つコロイド蛋白が入っているとどうなるでしょう？

コロイド蛋白が+1や-1の場合、水分子の H_3O^+ と HO^- と反応し、電気泳動により磁石のように引き合いや反発を起こしてしまいます。

つまり人体内では、細胞水の中、血液の中、リンパ液の中、髄液の中、いずれにも水が含まれていますから、そこにナノレベルのコロイド蛋白があれば、水分子と反応し、電気泳動が常に起こされます。

1 1. ブラウン運動

水分子の中で、コロイド蛋白のように小さな粒子が動く様子は、現在の物理化学で「ブラウン運動」と呼ばれています。

この現象は19世紀初頭に、イギリスのロバート・ブラウンという植物学者により確認されました。研究のために分解した花粉を顕微鏡で見て気づいたのですが、間もなく鉱物の粉も同じ運動を起こすことが確認され、この運動は生命活動とは関係ないと定義されました。

ブラウン運動のメカニズムは、20世紀に入って間もなく、アインシュタインが定義しました。彼は、ブラウン運動は熱環境で起こる分子や原子の衝突であると考え、動く距離と熱の関係を法則化し、理論として確立しました。この法則をペランが実験で証明して、ここから原子の存在が明らかになりました。ペランはこの功績でノーベル賞を受賞、アインシュタインのブラウン運動に関する法則も正しいとされました。

以後、物理化学界では、ブラウン運動は生命現象と関係なく、原子や分子の衝突という、統計学的な運動として世界中で研究が進みました。

そして量子生態学では、この2つの出来事が過ちの起点、と考えています。

21世紀に生きる私は、18世紀にロバート・ブラウンが見たのと同じ分子運動を見ていました。植物はもちろん、同じように鉱物の粉も見ていました。そして確かに、地球上のあらゆる「もの」がブラウン運動を起こしていました。生命も、土も、鉱物の粒子も、化粧品や洗剤や、野菜や、果物や、そして、私の血液もです。

最初に見たのは、自分の畑の土のブラウン運動や、自分で作った野菜や果物のブラウン運動、それを食べた自分の血液のブラウン運動でした。

それは単に、自分が耕す農地の土や自分で作った作物の持つ、分子への興味でした。でもすぐに、自分の農業技術で作った野菜と慣行農法の野菜では、分子運動はどんなふうに違うだろう？と、比較したくなりました。

私は自分の農地の地下水を、特殊な方法で浄化していました。理由は、汚染問題です。

平成に入って後、日本国内の地下水汚染は深刻になっていました。水質検査すると、殆どの浅井戸で、大腸菌や亜硝酸の検出が顕著でした。平成中頃には環境省でも毎年、全国で地下水質の測定を実施するようになっていました。そして農地では汚染源不明のまま、亜硝酸汚染が広がっている実態が見えていました。

作物は地下水を吸い上げて育ちますから、農作物への影響を懸念し、私は地下水を浄化して作物を生産していました。比較したくなかったのは、顕微鏡観察で自分の技術の有効性が確認できるかもしれない、そんな理由でした。

私の観察は、さらに発展しました。自分の血液はどうなっているのだろう、そんな興味から血液観察まで始めていました。

私と夫はかつて医者から治らないと言われた病気を、生活改善で完治していました。食生活では野菜の品質に気を遣い、そこから水質が野菜の質を左右し、農地の地下水汚染排除の必要性に気づきました。間もなく、友人知人達が、私たちの理論や考えに賛同しはじめ、私たちの生活改善を導入する人たちが出てきました。やがて彼らも自分の血液に興味を持ち、自分の血液を観察するようになりました。

こうして分子観察は、偶然にも、自分の技術理論を反映した自然界のブラウン運動と、何もしない普通のブラウン運動を、土や作物や血液など様々な分野で比較観察する事態になっていました。

そしてわかったのが、ブラウン運動のメカニズムです。

水の場合では、水分子が、粒としての回転、双極子としての磁石反応、+や-のエネルギーによる磁石反応、と、様々な運動とエネルギー変化を持つ、複雑な場になっています。また水分子がイオン化した H_3O^+ と HO^- 以外にも、様々な荷電分子が存在しており、水分子とそれらの分子や原子が相互反応し、電磁気的な引き合いと反発の繰り返しが止まることなく発生しています。

そこに新たなナノレベルの粒子が入ると、水分子やその他の分子の動きに巻き込まれ、動きたくなくても、粒子の回転や揺さぶりが促されます。

もしこのナノレベル粒子が+に帯電していれば、 HO^- や同じように適合するイオン化分子と磁石のように引き合い、-に帯電していれば H_3O^+ や同じように適合するイオン化分子と引き合い、荷電状態がぴったり一致すると±0になり、析出して、新しい「粒」分子を生成します。

また帯電していないナノ粒子も、ブラウン運動の場で揺り動かされ続け、電磁気に会い続けると、やがて粒子のいちばん外側のはずれやすい電子が動かされてしまいます。するとこの分子はエネルギー化して、帯電します。

従って、電荷の無いタンパク質分子もナノレベルであれば、電子が動いて離れ、+電荷のコロイド蛋白に変化します。

外側の電子が外れて作られた新しいコロイド蛋白は、ブラウン運動の中で相反する-

電荷の粒子と結合し、以前とは違う、新しい分子になります。つまり、古いタンパク質から新しいタンパク質に変化します。

これが、古い細胞と新しい細胞を入れ替える、代謝です。ですからブラウン運動の場は、代謝を実現する場になっています。

人体には、血液や、リンパ液や、細胞質や、髄液など、ありとあらゆる部位に水分を持つ体液がありますが、そこには膨大な種類と数のコロイド蛋白が存在します。いずれも、この動きの中で電子移動が促され、様々な分子を壊し、新しい分子の作り替えが進んでいます。

従って、水が存在しないとブラウン運動が起こせず、ブラウン運動が起こせないと代謝ができず、故に生命が維持できないのです。

これが、生命に水が必須の理由です。

1 2. ブラウン運動と人体

水の場合のブラウン運動が代謝を司ることがわかれば、自ずとウィルスの仕組みが判明します。

微生物や菌類は細胞質を持ち、細胞質内には水の場合があります。ですから、自分の持つ水分環境でブラウン運動を起こすことができます。従って、人に寄生しなくても自己増殖が可能です。

一方ウィルスは、遺伝子を持ちますが細胞質が無く水分を持たないため、ブラウン運動を起こせません。ウィルスは水の場合を持たず、単独でブラウン運動を実現できないため、自己増殖ができないのです。

でも人の体内に入り水分に出会うと、途端にブラウン運動を開始します。そして侵入した人体のコロイド蛋白やイオン化分子類を使い、自己増殖を実現します。

ウィルスにとって母胎となる人体水分の電磁気環境が、ウィルスが新たな細胞形成を促す水質の場合は、ウィルスの自己増殖能力は活性して人体は大きく感染されます。

しかし形成を阻止する水質の場合は、ウィルスは自己増殖できません。

同じウィルスに感染しても、症状を発症する人とならない人の差の原因が、上記のような体内水の電磁気環境に由来します。それは、細胞水や、血液血漿質や、その中のコロイド蛋白の分子構成などで、ウィルスが侵入した場の環境に影響されます。

人体に悪影響をもたらしたコロイド蛋白の事例で皆さんがよく知るのが、水俣病です。

水俣病は、メチル水銀が魚の食事を通して体内に侵入し、病気として発生しました。メチル水銀による分子が、メチオニン酷似の分子を作り脳関門を通過、脳内で異常蛋白を形成したのが原因です。

これと類似するのが、認知症のアミロイドβやレビー小体の形成です。

現代社会は、添加物として多様な化学分子が人為的に作られています。これらの中にナノレベルのコロイド状の有機系分子が多種あり、添加物として、食品、歯磨き、入浴剤、化粧品、その他の日用品等々を介して、全身の血液に入りこんでいます。

そのうちのいずれかの種類が脳関門を通過し、水俣病のメチオニンに酷似した分子を作ったと同様のメカニズムで、脳内水分の水質汚染と複合して、異常なタンパク質を作っていると考えられます。

アミロイドβの形成箇所とレビー小体の形成箇所と位置が違いますから、脳内各部位ごとにブラウン運動や電磁気環境の要素を解明し、これに結合する人為合成分子の荷電状況がわかれば、日用品などで使われている添加物分子の種類を特定できます。一方で、結合した異常タンパク質を分離する安全な電荷成分や機械的な処理方法が開発できれば、認知症の治療に繋がります。また異常分子合成を促す分子類の、体内に入る物品への使用を禁止すれば、予防対策になり、認知症は防げます。

もう一つ、認知症の原因に、脳の萎縮があります。
これもブラウン運動の異常が関与します。

ブラウン運動の場では、水分子などの溶液とコロイド粒子が、お互いに引き合いと反発を常時起こしています。

野菜の鮮度は、このバランスが長く維持されることで水分保持が続き、日持ちに反映されます。人体内も同じで、細胞内で、水分子とコロイド蛋白が均等分散し、良い電磁気環境のバランス関係が続くと、いつまでも水分がその場に維持され、ふくよかで弾力性がある、瑞々しい細胞維持が長期間実現します。

ところが水の場に異常な電磁気や異常な電荷のコロイド粒子が入り込むと、本来の引き合いと反発の反復ができません。そればかりか、異常分子と正常なコロイド蛋白が電磁氣的に引き合い、電荷が一致すると異常分子を形成してしまいます。すると、分子たちに偏りが生まれ、水分保持ができなくなります。そして少しずつ水分は抜け、脳萎縮が発生します。

がんも、同じメカニズムで起きます。

がんは、体内に侵入する異常なコロイド粒子の電荷特徴により、臓器や細胞などの集合する部位が決まります。特定の異常なコロイド粒子は、異常分子の電磁気に見合った臓器に引き寄せられ、特有のブラウン運動の異常が促進されます。するとその部位に、集中してがん細胞を生成することになります。

量子生態学で見ると、病気の発生要因は全てこのように、体内のブラウン運動の異常に起因します。そして、人体に影響する異常電荷が、どんな部位のブラウン運動に影響するか、部位別の電磁気環境の特徴次第で、病気になる部位や病気の様相が変わります。

いずれにしても、食事や日用品を通し、水分や分子の電磁気が自然界に沿わない分子を体内に入れ続けることで、体内の電磁気環境が狂った場所が生まれ、その部位に疾病が発生します。

1 3.人体血液のブラウン運動

ブラウン運動の基本メカニズムや人体への影響に気づいたのは、自分の血液からでした。

自分の血液をあれこれ観察していると、赤血球の間に粒が見えたり見えなかったり、その時々で微妙な違いがありました。でも、どんな影響で変わるのかわかりませんでした。

あるとき、ふと思い立って、血液検体のプレパラートをカバーガラスの上から押しつぶしてみました。単純に、どうなるのかな、という思いに過ぎませんでした。

間もなく、崩壊させると常に、大量のナノ粒子が出てくることがわかりました。また、健康な赤血球の場合は、赤血球膜に弾力性があるため容易に崩壊しないことや、何らかのダメージ受け度合いがひどいと、プレパラートに血液を置いただけでも赤血球が崩壊することもわかりました。

血液を置いただけで赤血球が崩壊する現象は、溶血と呼ばれる状態です。量子生態学を支持してくれた人が、福島第一原子力発電所の事故直後、無防備で建屋に入ってしまった。約二年後、体調不良を訴え来訪、血液を確認したときの現象でした。すぐに入院し専門医の治療を受け、数年かかりましたが、その後元気になりました。ちなみに溶血は、この一例しか見たことがありません。

話を戻します。

赤血球を崩壊させると、ナノ粒子が大量に出るとわかり、以後は毎回、検体を圧迫して赤血球を崩壊して観察するようになりました。やがて、出てきたナノ粒子のブラウン運動は、土や野菜と同じような動きを持っていることがわかりました。

また、土も野菜も人体も、いずれも同じ内容でブラウン運動をコントロールすると、運動の傾向も同じように変化することがわかり、地球自然界のブラウン運動は、「もの」の区別無く、共通性があることにも気づきました。

その後、土も植物も人体も共通して地球自然界の健全なブラウン運動の動きがあるとわかり、人体血液のブラウン運動の観察により、その人が自然界のブラウン運動に沿う体内環境を持つか否かも、判別できるとわかりました。

血液のブラウン運動が自然摂理に沿っていれば、病気リスクとは縁遠い健康状態です。ブラウン運動が自然摂理に反していれば、いずれ異常発生に繋がります。

ただし、観察時のブラウン運動異常が、直接病気を示しているわけではなく、観察時は皆さん殆ど健康体です。ただ異常を持ち続けると確実に病気発生に繋がるので、今の生活のまま過ごして良いか、そんな判断ができるので、予防策に有効とわかりました。

この健康状態の確認方法技術は、2021年に特許取得しました。詳細は特許文献でご覧頂けます。また「量子生態学」テキストは、特許技術を活用するための、背景理論のテキストにもなっていますので、セットでご確認ください。

(特許第6864279号/情報収集方法、情報収集システム及び情報収集装置/発明者：野上導子(本名です)/技術名称：血中ナノ粒子の動態変化による代謝能力検査システム)

人体血液のブラウン運動観察について、もう少し詳しく説明します。

最初に、観察に使う顕微鏡についてです。

ブラウン運動の観察は、検体に熱影響が出ないように、LED光源による位相差顕微鏡で見えています。倍率は900倍、3600倍、5400倍の3種類で、どんな検体も必ず3種類の画像を確認します。小さな倍率で全体を見るのと大きな倍率で一部を拡大して見るのと、把握できる内容が違うので、必ず全ての倍率を確認します。

観察物は液状にしてプレパラートに載せ、18×18mmのカバーガラスを掛けて検体を作ります。血液は液体なので、何の処理も必要ありません。そのままプレパラートに落とせばOKです。

検体を放置する時間経過処置が必要な場合は、ラップできっちりくるみ、余分な酸素に触れないようにします。

ブラウン運動は溶液の電磁気環境で変化するので、血液を染色処理すると正しいブラウン運動を把握できません。観察する場合は、その点に注意してください。

では、血液の様子を説明します。

健康な赤血球の内部では、ヘモグロビンなどのナノレベルのコロイド蛋白と血漿質が、均等な間隔で引き合いと反発を繰り返しながら赤血球膜内を周回回転しています。大量のナノレベルの粒子と水分が一体で円周に沿って回転することで遠心力が生まれ、赤血球膜内の中心には凹みが作られます。そして赤血球膜は外側に引っ張られ、ハリを持った正円形が形成されます。

赤血球内のこの運動がバランス良く続く間、中央に凹みを持つ美しい正円系は維持されます。

次に、赤血球膜を崩壊させ、ヘモグロビンなどの粒子を外へ出します。潰れない赤血球もありますが、問題ありません。一部でもコロイド蛋白が外へ出たら、それらが集まって見える部分を観察します。

外へ出た粒子たちのうち、ヘモグロビン類はおよそ100nm前後です。これより小さい粒子の存在もあると思われませんが、私が使う顕微鏡では確認できません。しかし影響なく

観察は行えます。

顕微鏡の向こうの粒子はブラウン運動を起こし、細かく微振動しながら泳ぐように動いています。これを放置し、時間経過すると、ところどころに粒子の集合が出てきます。集まる形は蛸足状や鎖状で、規則性はありません。

量子生態学では、ブラウン運動の場で、ひと粒ずつバラバラで動く分子の様子を「独立」、粒子に偏りが出て集合する様子を「偏向」と呼びます。

赤血球崩壊直後、粒子は単独でブラウン運動を起こしており、これが「独立」です。時間経過後、粒子が集まり蛸足状や鎖状や、その他の形状に繋がる状態が、「偏向」です。ブラウン運動を起こしていた粒子が止まった状態を、「停止」と呼びます。

赤血球を崩壊させ、およそ24時間内外放置すると、正常な血液は細胞のような塊が画面を占拠する状態に変化します。これは、血液が凝固して、タンパク質の細胞塊に変わったものです。

この塊の縁回りには、まだ赤血球やコロイド蛋白などの粒子の動きが残って見えます。その後さらに時間が経つと、最後には赤血球も粒も見えなくなるか、粒が見えても運動を停止します。これがおよそ、48時間内外以降です。

この変化の仕組みを説明します。

血液を採取すると、途端に空気に触れ、酸化が始まります。酸化により新しい電子移動が発生し、血液のブラウン運動の場は、電磁気環境が変化します。電磁気環境の変化をきっかけに運動は変化し、赤血球や内部粒子たちは繋がりを作り始め、蛸足や鎖状を作り、最終的に細胞塊に変化します。

この細胞塊を作る際に、水分子の H_3O^+ と HO^- や他の分子類と結合し、新しい分子が作られます。細胞塊に変化する時間は正常な場合で、ほぼ24時間内外です。

しかし代謝が落ちた高齢者や、ストレスがある人は、36時間~48時間かかる場合があります。

経過時間が多くても、偏向の集合形状が蛸足や鎖状の場合は、問題ありません。

(動画資料 健康な人体血液のブラウン運動顕微鏡映像

<https://www.youtube.com/@qenogami/videos> 参照)

14. 異常な血液のブラウン運動

次に、地球の生態系に沿わない、異常血液のブラウン運動を説明します。
ブラウン運動の異常は、赤血球の形状でも確認できます。

先に記したように、正常な赤血球は、ハリのあるきれいな円形を持ちます。赤血球内部の水分とコロイド蛋白の電磁気バランスが絶妙で、均等分散関係を保持するためです。

ところが電磁気バランスが悪いと、コロイド蛋白同士が赤血球内で引き合う状態が発生します。すると血漿質と粒子間で均等分散バランスが作れなくなり、周回回転できず赤血球は円形を保てなかったり、中央の凹みが無くなったりします。

集合する粒子が少なければ、小さいびつや小さな突起になります。もし粒子の集合が大量に発生すると、金平糖のようなイガイガになります。金平糖になると、凹みは皆無です。

赤血球形状が小さいびつ程度なら、現在の健康状態に大きな異常はありません。けれども解消しない生活を続けると、いずれ大きいびつの形成や金平糖状に発展する可能性があります。金平糖状の赤血球が多い人は、がんと宣告された人によく見かけるので、要注意です。

次に赤血球を崩壊させて外へ出した、コロイド蛋白の様子です。

ブラウン運動を異常にする要素のひとつに、大きめの粒子の侵入があります。

ヘモグロビン類は100nm前後ですが、倍近い大きさの粒子を見かける場合があります。大きな粒子の原因は、二つあります。ひとつは、ブラウン運動異常でヘモグロビンが偏向して粒状に集合した場合、もうひとつは赤血球に侵入してしまった大きな異常分子、いずれかです。

ブラウン運動内にこのような大粒分子を確認したら、その人は自然摂理に沿わない日常生活を送っている可能性が多大了。サプリメントが原因だったり、病気で治療用の医薬品分子が原因の場合もあり、摂取品の内容を確認することも必要です。

次に、潰した状態のまま、放置します。放置するときは、ラップなどできっちりくろみ、酸素に触れないようにして保管します。

およそ24時間ほど経過すると、コロイド粒子の一部に偏向が生まれます。上記で説明したように、大粒分子を持っていても、蛸足や鎖状の集合だけの場合は問題ありません。

一方、大粒分子は無くても、太陽のようなコロナ状の粒子が出現したら、要注意です。

コロナ状の粒子は、食生活や日用品に注意している健康な人たちには、殆ど見られません。生活の質に無頓着な人たちや外食に依存する人、コンビニ弁当やジャンクフードが大好きなど、偏りがある粗悪な食生活の人に多く見かけます。

この粒子は円系状の大きめの分子で、新型コロナウイルスのスパイクタンパク質に、似ています。円形や楕円形の分子形状になり、周囲に一定間隔のひげを持ち、整形的に粒子が集合する、偏向です。

しかし、私が見てきた自然に沿ったコロイド蛋白の偏向は、このような整形的で規則的な形状は作りません。その差は、畑で採れる野菜や果物の形と、お菓子や加工食品など工場生産する規格品と、違いが似ていると思います。

自然の作物は、四方八方、規格に沿った形状は生まれませんが、人間が関与する工場生産品は、ぴったり同じ寸法で大量に生産されます。

その一方で、自然形状に類するコロイド蛋白の蛸足や鎖状の繋がり、むちゃくちゃに集合しているようでも、電磁氣的に一定のルールがあり、実に不思議な電磁気環境による集合を作るようです。そんな自然摂理に沿う粒子の能力が、複雑な遺伝子の配列に反映されていると考えられます。

コロナ状が観られる血液は、正常なブラウン運動を持たない傾向があります。

最悪の事例では、若くても48時間経っても細胞塊が作れず、顕微鏡の向こうの血液のコロイド蛋白は、いつまでもブラウン運動を起こし続けるケースがあります。それは、自然界に存在しない分子が、体内を席卷していることを意味します。

異常分子は、ヘモグロビンなどの自然界の分子運動と比べると動きが激しく、狂ったような動きを呈します。そんな自然摂理のコントロールを超える分子運動が体内にあると、正常な自律神経の電磁氣的な伝達は作用せず、勝手な運動が体内で発生しつづけます。すると疲れやすいなど、何らかの体調不良が出てきます。

また動きが激しい異常分子が全身に及ぶと、多動性などの異常を起こすことも考えられます。全身のブラウン運動の場で、異常分子が狂ったように激しい運動を起こすため、気を落ち着けてじっと座ってられないのです。

量子生態学では、コロイド蛋白のようなナノレベルの自然界に沿った粒子を「同種生体分子」と呼びます。一方、コロナ状を呈するような異常なナノレベルの粒子を、「異種生体分子」と呼び、区別しています。

(動画資料 人体血液の異常なブラウン運動顕微鏡映像

<https://www.youtube.com/@qenogami/videos> 参照)

1 5. 遺伝子前駆分子論

血液を顕微鏡で見ていると、血液は細胞の素になっている、そう思えてきます。

この考えと同様の理論を、昭和20～30年頃、千島喜久夫という生物学者が提唱していました。私が観た血液変化と同じような現象を、古い時代に、千島も観ていたと思います。

千島が所属した大学の教授は、顕微鏡観察で現象を確認したにも関わらず、論文を却下しました。また関連学会も、世界の生物学に間違いは無いとする先入観や科学者のプライドのもと、千島の学会発表は叶わず論文は潰されました。

昭和40年前後の国会で、他の研究者のテーマに関連して取り上げられ科学技術振興会議で公的検証が提案されましたが、果たされないまま、世の中の表舞台から消えました。

しかし私の血液観察でも、24～48時間経過後には、人体の血液はタンパク質塊に変化します。千島と同じで、この画像はどう見ても細胞状で、血液は細胞に変化したとしか見えません。

ただし、どのように変化して行くのか、その過程を見たことがありません。設備の問題もあり、積極的に追求していないのですが、確認は簡単だと思います。

検体を載せた顕微鏡のスイッチを入れたまま、観察映像をPCデバイスに記録し続けられればOKです。全てが映像として残りますから、後日データを確認すれば良いだけです。

この方法で顕微鏡映像を記録すると、コロイド蛋白が偏向する経過や、コロナ状のスパイクタンパク質が形成される動きも、画面で追跡することができるでしょう。

同じ方法で、血漿質や人為的な分子投入などのコントロールを繰り返し、都度、偏向の状況変化を探れば、様々な電磁気の影響現象も解明できるはずです。もちろん、ブラウン運動を正常化する有効な薬剤の確認にも、貢献できるでしょう。

mRNAワクチンによるブラウン運動への影響も、同じように確認できると思います。

いずれも2～3日で変化する、自然摂理の分子運動の世界です。短時間で、自然界に沿う薬剤の判別方法として、治験にも活用できると思います。

ところで、細胞形成にDNA遺伝子が必要だとしたら、この観察で見る、血液だけから作られる細胞塊に、遺伝子はどう反映されるのでしょうか？

遺伝子は細胞質の核の中にあるとされ、血液の赤血球には核が無く、細胞質と同等のDNAの存在は認められていません。その細胞内では、何らかの条件変化でスイッチONに

なるとmRNAが登場し、細胞核内のDNA情報をコピーし、翻訳して遺伝子を反映した新しいタンパク質を作るとされています。

本当にそうでしょうか？

DNAは、生物の個体情報を、本当に伝達しているのでしょうか？

遡って考えてみて、DNAは進化の過程で、どのように登場したのでしょうか？

ではDNAよりも先に登場したはずの生命の素は、地球上でどのように発生したのでしょうか？

生命の起源について世界中が興味を持っていますが、それは、宇宙から飛来したと考えられています。日本でも解明に挑んでいます。私は個人的に、それは違うと思っています。仮に本当に生命の素が宇宙から来たとして、ナノレベルのタンパク質の素が、違う環境の惑星に根付き、その後大量に増加し生物相への進化発展が可能なのか、疑問です。

無謀にも、私がこのように現在の科学界に反論するのは、私自身が、農地で作物を育て、自分がそれを食べて生命を維持し、そのブラウン運動を観察する体験を得ているためです。研究室のピーカーや試験管では無く、食物連鎖として自然界を変遷している、土や植物や人体のそれぞれの分子を、自然界のブラウン運動として観察し続けたからです。

そして無機も有機も、ブラウン運動は同じメカニズムを持つことがわかりました。

そんな経緯や理論に基づくと、生命の素は原始地球時代に進化の過程で登場したとしか考えられません。

進化の過程については、ここでは簡単に説明します。詳しい内容は、「量子生態学」テキストと「意識を持つ原子たちネクス・AIが人間に変わる日」に解説していますので、興味がある方はそちらもご覧ください。

では、生命の素はどこから来たのか、量子生態学の結論は、原始地球時代にオーシャンマグマから最初に析出した、炭素原子が起源だと考えています。

地球上で最初に登場した「もの」としての粒が、炭素原子ということです。

オーシャンマグマが冷える過程の温度変化を前提にすると、最も早く析出するのは、最も高温でしか溶けない、炭素原子です。

析出後、炭素原子がどのような分子変化を辿るかは、原始地球時代の大气などの原子の存在環境を追うと、自ずと決定されます。その結果考えられるのが、最初の有機物分子、ピロール分子の形成です。これが様々な有機物へと変化し、後に、一部が葉緑素へと進化します。

この葉緑素がさらに進化を経て登場したのが、ヘモグロビンです。

ヘモグロビンは、進化を促すブラウン運動の中で、葉緑素を作る環状ポルフィリンを活用してマグネシウムを鉄に置き換える電磁気反応を獲得し、形成された分子です。

ヘモグロビンの登場により哺乳類が決定され、その後、人類へと発展します。ほんの僅かな電磁気環境の違いが原子や分子の結合差を作り進化の道筋を分け、哺乳類への系統を形成したと、量子生態学では想定しています。

初期のヘモグロビンは、原始時代の溶液環境によるブラウン運動の場で誕生しました。最初のヘモグロビンに対し、水素原子たった1個の結合の有無でも、次の世代の分子に、2通りの形状差を作ります。その結合の違いは、実に微妙な電磁気環境の違いで生まれたと思います。

ヘモグロビンに微妙な違いが作られると、次の分子変化がさらに違いを拡大します。これが系統の分岐に繋がり、やがて同じヘモグロビンを持っていても、犬や猫や人間などの様々な種を作りました。

つまり人間は、人間へと進化するブラウン運動の電磁気環境に反応しながら、現在の人類へ繋がる、特有のヘモグロビン構造を作ったのです。

このように考えると、DNA情報より先に、哺乳類を特定するヘモグロビンが無ければ、人間としての形態が整わないことが理解できます。とするとヘモグロビンは、今の物理化学による概念のDNAの前に存在しなければならず、それは、哺乳類としての形態機能を遺伝する、分子機能性を持つことが想定されます。

つまりヘモグロビンは、DNA以前の遺伝機能分子であり、量子生態学では「遺伝子前駆分子」と呼んでいます。

16. 遺伝子のスイッチON

では、赤ちゃんはどのように作られるのでしょうか。

遺伝子前駆分子の存在を前提に、お母さんのお腹の中の、赤ちゃんの形成を考えてみます。

最初に生物の起源として単細胞が登場し、それが複雑化して、雌雄を持つ細胞体を作りました。ここから受精卵を作るシステムが進化しますが、受精卵もまたブラウン運動の中で、ほんの僅かな原子構成の差を作り、進化系統を分岐させています。

その系統は、卵生動物、卵胎生動物、そして胎生動物へと発展します。

私たち人間は、哺乳類で、胎生動物に当たります。

胎生動物は、お母さんの子宮内に受精卵が着床し、赤ちゃんを作ります。

両親の細胞情報を持つ受精卵がお母さんの子宮に落ち着くと、赤ちゃんが育つための基地として胎盤が作られへその緒で繋がります。赤ちゃんはへその緒を通して、胎盤に届くお母さんの血液成分を受け取り、人体を整えます。

お母さんの胎内は羊水で満たされ、胎盤へお母さんの血液が流れ、赤ちゃんの形成全ての環境に、お母さんの持つブラウン運動が作用します。その中で赤ちゃんは人間として、脳や骨格や細胞や様々な臓器を、原子を繋げ集合させて組み立てます。

そして量子生態学の遺伝子前駆分子論によれば、赤ちゃんが人体として整うための情報を、そっくり忠実に再現する情報として伝える役割が、ヘモグロビンになります。

赤ちゃんは、お母さんの赤血球内のヘモグロビンを使い、「人体」を作る原子構成の情報を得て、電磁気反応を繰り返し、人間として完成されます。この反応は、お母さんのお腹の中で、お母さんと同じブラウン運動、お母さんと同じ電磁気環境、と、全て、お母さんの環境を使用します。

細胞が整う中で、お母さんの血液の中のヘモグロビンが哺乳類胎生動物という動物的な構成情報の提供を担い、人体特性やお父さんやお母さんの姿形、髪の毛や目の色や肌の色や身長などの個体差を、現在の概念のDNAが担っていると考えられます。

上記を裏付けるメカニズムとして、母性遺伝が挙げられます。

母性遺伝とは、母親だけの情報が伝えられるシステムのことです。ミトコンドリアに反映されています。ミトコンドリアはお母さんの遺伝情報しか持たず、これがミトコンドリアDNAに反映されるなら、種の遺伝情報を司るヘモグロビンはお母さんからしか届かず、

従って、哺乳類胎生動物という構成情報の伝達は、母性遺伝が担っていると考えられます。とすると、ミトコンドリアDNAも、同じように哺乳類胎生動物を特定する遺伝情報も持つことになり、ミトコンドリアは、人間という人体構造を整える、あらゆる情報を把握しているはずです。

ミトコンドリアについては、厚生労働省のサイトに次のような説明があります。

(<https://www.e-healthnet.mhlw.go.jp/information/dictionary/exercise/ys-054.html>)

ミトコンドリアは、細胞内に存在する細胞内小器官であり、1細胞あたり100個から2000個程度含まれます。その構造としては、外膜と内膜の二重の生体膜によって囲まれ、内部が膜間部とマトリクスという空間に分けられています。マトリクス内には、ミトコンドリアDNAが存在しています。

このミトコンドリアDNAは、わずかではありますが、ミトコンドリアにおけるエネルギー生成に重要な遺伝情報を持っています。一方、機能としては細胞内におけるエネルギー(ATP)生成の役割や、アポトーシス(細胞死)に役割を担っています。

また、運動を行う際に生体は筋肉を収縮させるための多くのエネルギーを必要とします。このエネルギーの大部分が、ミトコンドリアによる有酸素性エネルギー代謝により作り出されます。継続的な運動(トレーニング)は、骨格筋や心筋におけるミトコンドリアの適応をもたらし、更なるエネルギー供給や疲労耐性を可能とします。

ここに、「ミトコンドリアDNAはエネルギー生成に重要な遺伝情報を持つ」と書かれています。また「細胞内のエネルギー(ATP)生成とアポトーシス(細胞死)に役割を担っている」、とも書いてあります。

現在の物理化学の概念によるとこのような表現しかできませんが、量子生態学と同じ現象を表現しています。この記述には、ミトコンドリアが担うブラウン運動の場の代謝様相が反映されています。

つまりブラウン運動により分子から電子が動かされると、分子はイオン化し、粒から

エネルギーに変化します。これをエネルギー（ATP）生成と表現しています。一方で粒の集合だった細胞は分解されて粒からイオンに変化します。すると分子類は「もの」ではなくなります。ただし、今の医学には細胞がイオンに変化する概念が無いため、「細胞死」という表現で、変化を示しています。

またミトコンドリアの有酸素性エネルギー代謝とは、電子移動による体内変化を意味します。

私が血液観察で見るコロイド蛋白の集合や細胞塊の形成は、血液採取で血液が酸素に触れることで電子移動が発生して、ブラウン運動の電磁気環境が変わる現象です。

厚生労働省による説明の、「継続的な運動（トレーニング）は、骨格筋や心筋におけるミトコンドリアの適応をもたらし、更なるエネルギー供給や疲労耐性を可能とします。」とは、ミトコンドリアのブラウン運動の場に新たに酸素が関与すると、水分が少ない筋肉に対してもミトコンドリアのブラウン運動による新しい細胞形成機能が適応され、新しい筋肉を作り筋肉疲労を解消する、となります。

この厚生労働省の説明を、量子生態学の現象論に置き換えてみると、以下のように単純な現象論に書き換えることができます。

ミトコンドリア内に酸素による酸化が関与すると、即座に電子移動が発露してブラウン運動の場の電磁気環境が変わり、粒とエネルギーの交換が始まり、新しい細胞の形成に繋がる

つまり人体では、ミトコンドリア内で酸素による酸化が電子移動を誘発すると、細胞の作り替えが開始されることとなります。遺伝情報のコピーが始まるわけです。

ですから、これが、「遺伝子のスイッチON」に該当すると考えられます。

17. 遺伝子前駆分子と種の決定

では、本当に、ヘモグロビンは遺伝子前駆分子なのでしょうか？
私がこれを確信した理由に、ひとつの血液観察事例があります。

たった一例しか見ていませんが、このケースを見て、ヘモグロビンが人間としての健全な人体形成を、遺伝として担っている可能性があると思いました。

対象は、異常を持って生まれた、顕微鏡観察当時8才の男の子です。

脳の異常、足の奇形、細胞形成ができず背が伸びない、と、複数の先天的な異常を持って生まれました。医者からは、DNAの一部に欠損があると診断されたそうです。

量子生態学に賛同くださり、ご家族で研究会へ入会されました。血液観察を希望され観察したところ、この子だけ最後までタンパク質塊ができませんでした。

採取直後の血液に異常は無かったのですが、24時間経過後もタンパク質塊が発達せず、48時間以上経過したところで、今まで見たことがない、角形にクラッシュした赤血球の変形物が出現していました。これには驚きました。

(動画資料 先天異常を持つ人体血液ブラウン運動顕微鏡映像
<https://www.youtube.com/@qenogami/videos> 参照)

お母さんの血液に問題は無い一方で、独身時代からずっとアトピーとのことで、入会時もひどい症状が続いていました。

アトピーも、ブラウン運動の異常で起こります。原因は、偽コロイド蛋白や異常分子の侵入です。毒性は小さいですが、メチル水銀と同様のメカニズムで、肌の細胞質に異常なタンパク質を作っていると考えられます。

おそらくお母さんの体内に異常分子が長期間蓄積し、ヘモグロビンそっくりの偽分子が赤血球内に侵入し、ヘモグロビンと交替したと考えられます。たまたま交替が盛んなときに妊娠し、偽ヘモグロビンが赤血球に入り、胎盤を通して受精卵へ届き、誤った人体の遺伝情報が届いたと思われます。

血液観察は、血液しか検体にしていません。もちろん細胞核はありませんから、血液観察の場には、DNAの介在は無いと考えられます。影響するのは赤血球やコロイド蛋白しかありません。そのコロイド蛋白の集合変化が、観たことも無い形に変化しました。

とすれば原因は、集合するコロイド蛋白、即ち、ヘモグロビンに異常であること以外、

原因が見つかりません。

生まれてから8年経てもその子は、異常なヘモグロビンしか作れない人体システムです。赤血球がクラッシュした形態になる様子から、哺乳類胎生動物として、臓器や細胞形成が正常に作れないのは、人体構造を特定するヘモグロビンの異常と考えられます。

人体は、あらゆるところに、くまなく血液が届けられています。どこかの部位が損傷しても、壊れた部位に関する正確な情報は、あらゆるところに存在する血液内のヘモグロビンが、哺乳類胎生動物としての遺伝情報を届けられているため、どんなところが損傷しても、ヘモグロビンが正しい遺伝情報を提供し、正しい人体として元通りになる、というのが、量子生態学の見解です。

では、従来のDNAはどんな役割なのでしょう？

DNAも遺伝情報を持ちますが、先に挙げたように、受精卵経由の情報です。ですからDNAは両親の個性を反映したDNA情報だろうと思われれます。ただ、哺乳類胎生動物のその先、種の決定にDNAが関与している可能性があります。

犬、猫、猿、人類と、いずれも哺乳類胎生動物として形態機能は共通です。いずれもヘモグロビンを持ちますからその先の種の決定をDNAが担っている、そう考えられます。

ここで触れておきたいことが、ダウン症についてです。

ダウン症は、頭部の形態や顔つきがほぼ同じようになります。これは、ヘモグロビンやDNAの持つ遺伝情報のうち、頭部に関する遺伝情報に同じタイプの異常が起き、反映されていることが想定されます。

水俣病は細胞レベルの異常で、対象となる人体が変わっても同じ分子物により同じ細胞異常が発生しました。ダウン症として同じような形態異常が発生するのは、同じ状態の遺伝子異常がそれぞれのお母さんの胎内に起こり、影響していると考えられます。

ダウン症を持つお母さんたちが、近年の食品や日用品に含まれる同じ構造の人為的な合成分子を取り込み、いずれも同じ偽コロイド蛋白を形成します。それらは同じ様子でヘモグロビンに影響します。同じ異常性のヘモグロビンが遺伝子前駆分子として、同じ異常遺伝子を作り同じ遺伝情報として、似たような異常を持つ人体に反映されている可能性があります。

ダウン症のご両親の、長期にわたる食生活や日用品の使用状況を把握すると、共通分子類の過剰摂取が見えるかも知れません。

18. ウィルスの増殖と増殖停止のメカニズム

ここでは、量子生態学に基づく、ウィルスの増殖システムを説明します。

量子生態学では、ウィルスは細胞質も血液も持たず、自身に水の間が無いために自らブラウン運動ができず、自己増殖できないと定義しています。またウィルスは、その大きさやブラウン運動との関係性を踏まえると、ヘモグロビンに類似する分子レベルです。

しかし、ヘモグロビンや同じレベルの多くのコロイド蛋白の小さな粒子は、自然界の中にあれば嫌でもブラウン運動を起こし、粒子を変化させます。一方、乾燥した場所であれば粒子を維持し、自分を保存できます。

もし、人類発生以前の自然環境中に産まれた粒子であれば、ナノレベルのコロイド蛋白は進化の過程でブラウン運動内に投げ込まれ、電子移動が起こり粒子形状の変化に繋がるはずですが、なのにウィルスが、単体粒子で存在を維持できているのは、何故でしょうか。

考えられる原因は、2つです。

ひとつは、砂漠などの乾燥条件下で存在し続けた可能性、もうひとつが、カプシドという殻やエンベロープという膜の獲得です。

カプシドもエンベロープも、ウィルス粒子本体の回りを囲む、タンパク質の包み紙のようなもののことです。

粒子本体が包まれて保護されていると、ブラウン運動内に入っても電磁気的な運動を起こせず、包みの中で単体で存在し続けることが可能です。

例えば、ウィルスが体内にあってもこの包みを破壊しなければ、ウィルス粒子本体はブラウン運動できず、自己増殖しません。そしてこれが、ウィルスに感染しても、体内で増殖する人とならない人となる原因になっていると想定できます。

もし増殖する場合、ウィルス粒子本体が包みから飛び出すには、包みのどこかに亀裂が入る必要があります。

量子生態学は、電子移動だけであらゆる現象を説明します。この包みに亀裂が入る様子は、量子生態学で見る現象変化の良い事例なので、次に説明します。

「もの」は、原子の集合体です。

原子と原子の繋がりは電子を共有することで作られ、カプシドもエンベロープも、共有結合というシステムで作られています。共有結合は、原子と原子が電子を共有する間は

繋がりが維持され、そこから電子が無くなると繋がりが切れる仕組みです。

ですから包みに亀裂ができ中の粒子が飛び出すには、包みから電子が無くなる必要があります。

その現象を起こすのが、+電荷を持つ何か、です。

包みが±0で粒として安定しているところに、放射能の電離のような強烈な+の荷電が近寄ると、-電子の1個程度はすぐに動いてしまい、消失します。影響する+の荷電エネルギーが強ければ、電子は次々に外され、原子の繋がりは切れ続け、包みは壊れます。

壊れれば、中のウィルスの粒子本体は、外に出ることができます。

外に出たところに水分があり、ブラウン運動ができ、ウィルスの電荷と反応する何らかのコロイド粒子があれば、結合して自分の遺伝情報を反映させ、増殖が実現します。

しかし、包みを持つウィルスの周りに強力な+電荷が無ければ、包みは電子を失えず、そのまま存在するだけで、無害です。

コロナウィルスも、他のウィルスも、メカニズムは同じです。

体内にウィルスが侵入しても、包みに亀裂を作る+荷電が無ければ、ウィルスの粒は外へ出ることができず、増殖できません。

それはどんな環境かと言えば、電子を奪うのが+電荷ですから、その反対の-電荷が作用する体内環境になります。-電荷を提供できる、コロイド蛋白やイオン化分子や単原子イオン類が体内に大量に在れば、+電荷の影響が及ばず包みは壊れないのです。

例えばどこかの部位に放射線が当たり、電離により電子が1個無くなったとします。その部位は+1に帯電しますが、-1の電子が体内水の中に豊富にあると、すぐに磁石のように引き寄せられてピタッとくっつきます。するとその部位は何事もなかったように、電荷が±0になり、元に戻ります。

これと同じ作用が起こる環境では、ウィルスは増殖も活性もできません。

この-電荷を持つものが抗体と呼ばれ、-電荷の構成により、抗体として機能するウィルスや菌類が違うと考えられます。

19. ウイルスの毒性と免疫力

量子生態学は、電子移動だけで現象変化を説明する学問です。

前の章で、電子移動だけでウイルス増殖メカニズムを説明しましたが、ここでも電子移動という同じ視点で、ウイルスの毒性と免疫力について述べます。

体内では、電子移動に関する異常が起こると、病気は発生します。

「もの」は原子の集合体で、原子の集合は、原子間の電子の共有性に依存しています。ですから、「もの」を構成する原子と原子を繋ぐ電子が全て無くなれば、その「もの」はバラバラに壊れます。

人体も同じです。

どこかの細胞を構成する原子の集合の一部から、集合を支える電子が強制的に動かされると、その部分の結合が切れて壊れます。その現象は、臓器や筋肉や神経、どんな部分でも、全て同じです。

一方、原子と原子が離れている間に電子が入り繋がると、「もの」が生まれます。

壊れた細胞や臓器、筋肉や神経も、壊れる前と、同じ数、同じ状況で、電子が元に戻れば、元通りに修復されます。

福島第一原子力発電所の災害事故時に、鼻血が出たという人がいました。事故と関係ないと言う人たちがたくさんいましたが、明らかに放射能の影響です。

事故で空気中に飛散した放射性物質を吸い込み、その粒子が鼻の粘膜で止まります。放射性物質はその部位で放射能を発揮し、電離を起こします。するとその部分は電子が動かされ、原子の結合が切れます。それは、該当部位の細胞破壊ですから、鼻血が出ます。

この電子移動で「もの」が破壊されるに伴い、必ず発生するのが、場の電荷異常です。

場全体が、電荷±0のところ電子移動が発生すると、場の電荷は+に傾きます。その部位は帯電し、電気を浴びたと同様の現象を呈します。

原発事故当時、顔がピリピリしたと言う人もいますが、これは飛散した放射性物質が顔に当たり電離を受け、電荷を持ったため、顔が電気を浴びたように感じた結果です。

原子の間に静かに位置していた電子が突然、異常移動するのは、本来その場に存在しないはずの+電荷が、新たに影響することが原因です。

今の社会には人為的に合成された分子類がたくさんあり、それらが人体に入り+電荷

で異常を起こしているケースがたくさんあると考えると良いと思います。医薬品も同じで、薬品の持つ成分に+の荷電分子があると、副作用として異常が発生します。

しかし、電子移動の異常に対応できる体内環境を持つ場合は、異常は常に消され、症状は出ません。

多くの人は、異常を消せる体内環境を持っており、これが、免疫力や自然治癒力と呼ばれます。量子生態学では、これを、「電荷補修能力」と表現します。

しかし電荷補修能力が不足して電荷異常を解消しきれないと、発生した異常部位は少しずつ蓄積します。目に見えないところで、人体が感じない小さな影響で少しずつ異常が蓄積され続けると、気がついた時には重症化が目前になっています。

その後、電荷補修の余力が全く無くなると、症状が一気に表面化します。

ウィルスの毒性も、同じメカニズムです。

ウィルスは、+電荷を帯びていると考えられます。何故なら、人体を壊すのはこれまで述べたように原子を繋ぐ電子を奪う作用であり、それが+電荷だからです。

従って、ウィルスというコロイド蛋白は、+の荷電分子と考えられます。

ウイルスを包むカプシドやエンベロープは、全体で電荷±0の一塊の粒という「もの」として成立しています。その粒がブラウン運動の場に入ると、電磁気や分子運動の刺激により、一部から電子が外れ始めます。するとエンベロープもカプシドも壊れ、やがてウィルス粒子本体の、コロイド蛋白が外へ出てきます。

上で述べたように、これは+荷電コロイド蛋白です。

外へ出て、この+荷電分子にピッタリ見合う-の荷電分子が近くにあれば、電磁氣的に引き合い±0の粒分子になり無害化されます。無害化された分子は人体に不要ですから、いずれ排泄されます。これが電荷補修能力に当たり、排泄される余分な分子は、-電荷を持つ抗体により作られると考えられます。

しかし-荷電分子という電荷補修能力が無いと、ウィルスは、+荷電のコロイド蛋白のまま、血液内に存在し続けます。

-荷電分子が無い血液環境とは、既に細胞水や血液水質が+に傾いている環境です。そこに新たな+荷電のコロイド蛋白が侵入し、+の電荷は増え、さらに体内は+電荷に傾きます。これが、免疫力が無い状態に当たります。

そして+電荷に傾いた血液は、全身を巡ります。血液が流れるあらゆる人体部位から電子を奪い、先々で原子の繋がりを切断します。

原子の繋がりが切れるとは、人体が壊れることを意味し、これがウィルスの毒性として症状が起こります。

20.RNA型ウイルス

ウイルスには、RNAを持つタイプとDNAを持つタイプの、2種類があります。

DNA型ウイルスはRNAの転写機能が伴わないと増殖できませんが、RNAタイプのウイルスは、ブラウン運動環境さえあれば、自分で遺伝子を複製し自己増殖できます。

私は、国が起こしたB型肝炎感染事故の、認定患者です。肝炎症状が無いキャリアですが、定期検査ではいつも、抗原が確認されます。

30代の不摂生時代、自分が感染者だとは知らず、でも、常に吐き気があり白目が黄色い気がしていました。体調も悪く、今思い返すと、B型肝炎の初期症状だったかもしれません。間もなく結婚、夫も持病があり二人とも薬嫌いだったため生活改善を開始、気づいたときには夫婦共々、すっかり健康になっていました。

それでも私の体内には、今も抗原が残っています。

私のB型肝炎ウイルス感染は、小学校低学年のときの集団ワクチン接種が原因です。感染者に刺した注射針に付着した血液により、私の体内にウイルスが入りました。

同じ状況で感染し、今も持続感染している人たちが、全国におよそ45万人程度いると想定されています。感染源はみんな、子ども時代の注射針に付着したほんの僅かな感染血液が原因です。そしてB型肝炎ウイルスは、DNAを持つタイプです。侵入先の人体RNAを使い、増殖します。

私の場合は、およそ60年の間、私の体内でRNAを使い自己増殖を続け、残存しています。そして抗体も生まれ続けています。

ただ私は、B型肝炎ウイルスに感染しても、電荷補修能力で抗体が作られ、感染症状は出ませんでした。しかし他の感染者の中には、肝臓がんや肝硬変へと病状が悪化し、死亡しているケースもたくさんあります。

B型肝炎ウイルスはDNA型ですが、このDNA情報は、肝臓という部位に特定して影響します。従ってこのウイルスのDNAは、肝臓の電磁気環境に引き寄せられる、電磁気特性を持つと考えられます。

一方、コロナウイルスはRNA型です。コロナウイルスのRNAの機能性やコロイド蛋白としての粒径を踏まえると、ヘモグロビンと同じレベルの粒子特性を持っています。

では、ヘモグロビンと同じ粒子特性を持つコロナウイルスが、ヘモグロビンと同じ場に侵入したらどうなるでしょう。

RNAは、侵入先の遺伝転写システムを使いません。ブラウン運動環境さえあれば、独

自に、増殖を開始します。そして、考えられる可能性として、ヘモグロビンに取って変わる事態があります。

その可能性を証明するようなコロナウィルスによる症状が、低酸素症です。

コロナウィルス感染の典型的な症状に、酸素飽和度の低下があります。すなわち、血中酸素量が低下します。この原因は、コロナウィルスが体内に侵入して増殖し、ヘモグロビンと交替する量が増えるためと考えられます。

ヘモグロビンが減少し酸素を運べなくなり、酸素飽和度が下がり低酸素症が起こっているのです。

これも、水俣病のメチル水銀が偽メチオニンを作ったのと、類似現象です。

即ち、異常コロイド蛋白による、電磁気的な誤作動で発生します。

ブラウン運動する異常なコロイド蛋白が人体内に入ると、体内の同じレベルの機能性のコロイド蛋白と交替する現象が、他にもたくさん起きていると思われます。

2 1.mRNAワクチン

私が感染したB型肝炎ウイルスは、使い回しの注射針に付着した、ほんの僅かな血液でした。注射針の使い回しは1948年～1988年まで行われ、既に亡くなった方もおられますが、まだ持続感染人数は45万人ほどいます。

私のように無症状でも、抗原は60年も体内に存在し続け、自分の免疫力が低下した場合、症状発生の危険性は常にあります。45万人中の無症状のキャリアは、全員、同じ状況下に置かれています。

遺伝機能を持つウイルスは、環境さえ合えば人体のブラウン運動を使い増殖します。ほんの少量の感染でも、ウイルスにとっては絶好の住処であり、このように延々と人体内で存命します。

では、今般の、mRNAタイプのウイルスワクチンを注射液として体内に入れた場合、どんな影響が及ぶのでしょうか。

mRNAワクチンについて、厚生労働省のサイトに次のような記述があります。
(<https://www.cov19-vaccine.mhlw.go.jp/qa/0021.html>)

ファイザー社及びモデルナ社のワクチン（*）はmRNAワクチンと呼ばれ、新型コロナウイルスのスパイクタンパク質（ウイルスがヒトの細胞へ侵入するために必要なタンパク質）の設計図となるmRNAを脂質の膜に包んだワクチンです。このワクチンを接種し、mRNAがヒトの細胞内に取り込まれると、このmRNAをもとに、細胞内でスパイクタンパク質が産生され、そのスパイクタンパク質に対する中和抗体産生や細胞性免疫応答が誘導されることで、新型コロナウイルスによる感染症の予防ができると考えられています。

また、アストラゼネカ社のワクチン（*）は、ウイルスベクターワクチンであり、新型コロナウイルスのスパイクタンパク質のアミノ酸配列をコードする遺伝子をサルアデノウイルス（風邪のウイルスであるアデノウイルスに、増殖できないよう処理が施されています。）に組み込んだワクチンです。このワクチンを接種し、遺伝子がヒトの細胞内に取り込まれると、この遺伝子をもとに細胞内でスパイクタンパク質が産生され、そのスパイクタンパク質に対する中和抗体産生及び細胞性免疫応答が誘導されることで、新型コロナウイルスによる感染症の予防ができると考えられています。

アストラゼネカ者のウィルスベクターは、遺伝子を運ぶ役割で、量子生態学の視点では、DNAの手前に存在するRNAと同じ機能性と考えられます。モデルナ社のワクチンは、ファイザー同様、mRNA由来です。

いずれも、ワクチン接種で中和抗体が作られる、としています。中和抗体とは、コロナウィルスが発生したとき、スパイクタンパク質の持つスパイクの先にくっついて、細胞への影響を無くす機能を持ちます。

量子生態学の視点で説明すると、スパイクの先にくっつく意味は、スパイク先の電荷と反対の電荷を持つ「何か」が生産され、これが電磁氣的に引き寄せられてくっつき、電荷が±0になり無害化する仕組みです。

ここで生産される「何か」が、中和抗体に当たります。

しかし今、ウィルスの研究界が観ているスパイクタンパク質は、エンベロープやカプシドを持つ姿です。すなわち、ブラウン運動の中で、増殖を果たすウィルスそのものの姿を、誰も観ていないと思われれます。

何故なら、私の顕微鏡観察で登場する、スパイクタンパク質そっくりのコロナ状の分子は、血液採取による酸化で電子移動が起きて以後、時間経過の後に形成されるからです。

酸素に触れ、遺伝子のスイッチがONになり、100nm前後及びそれ以下のコロイド蛋白が偏向し、集合体として新たな分子に成立した結果、作られています。いずれも採決後、数時間以降から形成されます。

採血直後は、いずれも100nmの粒に過ぎず、どれが異常なコロイド蛋白か判別できません。しかし放置して時間経過後に、正常な場合は観られないコロナ状の偏向分子が登場し、ここで初めて確認できます。ですから、今科学界で観ているスパイクタンパク質は、人体内で作用する、ウィルスの本当の姿ではないかもしれません。

重ねて、現在の研究手法ではタンパク質の検体作成には、染色を施しています。コロイド蛋白は染色液により電磁気反応が犯されてしまい、正しい姿を見ていないことも想定されます。

ですから、スパイクの先にくっつく中和抗体の作用を研究室で確認したとしても、それは顕微鏡の中だけで、人体内で作用しているウィルスの毒性を本当に排除したことになるかどうか、疑問です。

私が観る血液でコロナ状になった粒子は、採血直後から酸素に晒され電子移動が発生し、電磁気環境の変化で偏向を起こして形成されたものです。このコロナ状は、電磁気が安定して電荷±0になって生まれた、新しい粒の姿です。従って染色の上で確認しているスパイクタンパク質のウィルスの姿は、通常は体外にあるときの姿だと推察できます。

即ち、ウィルス単体で自然界に存在するために、外側に包みを持った状態です。

では、mRNAワクチンは、何を体内に入れているのでしょうか。

mRNAワクチンの成分は、コロナウィルスから取り出した遺伝情報とされています。

顕微鏡で研究者の皆さんが観ている、スパイクタンパク質からエンベロープを破壊し、さらにカプシドを破壊し、中に閉じ込められていたRNA本体を取り出しています。

取り出したRNA本体を、人為的に合成した新しい脂質の膜で覆い、注射器で体内に入れています。

コロナウィルスである、スパイクタンパク質の大きさは、100~200nmとされています。取り出したmRNAによるワクチン粒子の大きさは、60~100nm、こちらはヘモグロビンとほぼ同じ大きさです。

従ってワクチン成分は、ウィルスの本体粒子、そのものを取り出しているようです。

2.2 mRNAワクチンの影響と対策

コロナワクチンは、取り出したmRNAの外側を人工的な脂質膜でくるみ、粒子本体が壊れないように安定化しています。

接種して体内に入りブラウン運動に出会うと、電子移動により脂質膜は崩壊し、中のコロナウイルス由来のmRNAが出てきます。しかし量子生態学で観ると、この粒子こそがウイルス本体で、先にも述べたように毒性を発揮する、+電荷を帯びた粒子です。

実際のコロナウイルス感染は、ヘモグロビンに置き換わるケースも観られ、低酸素症を起こしました。しかしワクチンのmRNAは、本来のRNAからほんの少し書き換えられており少し症状が違うようで、ワクチン接種では低酸素症は見られません。

一方、副反応は多くの人に起こされています。でもいずれも、数日で治まります。

多くは体内環境に電荷補修能力がありますから、仮にワクチンが何らかの副作用的な害を起こしても打ち消し、症状は継続しないと思います。

しかしこれは、明らかにワクチンによるウイルス粒子本体の+電荷による毒性が原因であると考えられます。

その上で、B型肝炎感染者がウイルスを数十年間保有し続けていることを踏まえると、ワクチン接種で体内に入ったmRNA情報を持つウイルス粒子本体も同じように、密かに体内に棲み着き、増殖を続ける可能性があります。

私の顕微鏡観察で数例ですが、mRNAワクチン接種者の血液を観察する機会がありました。今まで見たことがない量で、コロナ状の異常なタンパク質が形成されていました。mRNAワクチンは確かに人体内に存在し続け、時間経過後にスパイクタンパク質分子を形成している、そう思いました。

ただし継続観察していないので、その後どうなるか、行く末はわかりません。

数ヶ月後、数年後、再度観察し、スパイクタンパク質が登場しなければ、問題無いと思います。

もし、数年後も継続して同じ形状のコロナ状の偏向が引き続き観られる場合は、コロナウイルスのmRNAレベルの粒子が増産されている可能性があります。しかも、現代社会に蔓延する体内に侵入した人為合成分子と反応し置き換わると、同じ粒子特性のヘモグロビンと替わり、細胞形成に影響することを否定できません。

B型肝炎は、肝臓という特定の部位に影響するDNAですが、コロナウイルスのRNAは特定部位ではなく、ヘモグロビンに類する、人体形成全般に影響を及ぼす情報特性です。

継続して顕微鏡で同じようなスパイクタンパク質を観たら、いずれ、体調不良に繋が

ることが考えられます。

個人の体内環境によりコロイド蛋白の構成内容が違うので、それぞれウィルスの電磁気が影響する部位が替わりますが、影響したところには炎症が発症すると思われます。それが神経伝達に影響すると激痛などに通じ、ホルモン分泌に影響すれば臓器の機能不全が起きます。そしてもし体内全般のブラウン運動に影響すれば、赤血球形状は金平糖状になり、がん発生に繋がります。

私の体内のB型肝炎ウィルス抗原は、少しずつ減っているそうです。多分肝炎ウィルスの包みを壊すような+電荷が無く、抗原が消滅する電磁気環境があるのだと思います。

そんな体内環境が実現したのは、生活改善でした。

その生活改善とは、現在の生活状況を一掃し、体内に入れる分子物を、自然界に沿った分子構成のものに徹底することです。

日常の摂取品から異常な+の電荷影響を起こすものを避け、体内で-電荷の作用を作る食品の摂取が重要です。

最も有効なのが、ヘモグロビンを作るための、植物のブラウン運動を呈するコロイド蛋白です。葉緑素系統の、環状ポルフィリン類を持つ野菜や果物です。

大量に持つのは、「旬」の野菜や果物で、これらを積極的に摂取することが必要です。旬を過ぎるとコロイド蛋白は減り、効果が薄れます。

野菜や果物の中のブラウン運動を起こすコロイド蛋白は、一般的な概念の栄養成分と連動していません。しかしこのコロイド蛋白は、生命力に影響しています。正常なコロイド蛋白が多ければ多いほど、エネルギー生産が多く、水分子との電磁気バランスが良く、作物であれば日持ちが長く、人体では若々しくいられます。

そんな成分を少しでも多く摂取することが、とても重要です。

水分の質も大切です。

清涼飲料水類は、着色料、香料、甘味料など、人為的に合成した分子を使っている場合が多々あります。いずれもイオン化し、体内に侵入し、人生を過ごす中で少しずつ悪影響を蓄積します。

腸内環境でイオン交換され、無害化できれば問題ありませんが、処理できなければ、血漿質や細胞水に侵入し、ブラウン運動を異常化し、コロナウィルスの活性に繋がりますし、がんになる確率も高まります。

2.3.量子生態学でできること

本書の多くは仮説ですが、想定できるメカニズムを洗い出し、理論的に導き出しながら説明しました。

中には、懸念を持つ方もいらっしゃると思います。でも、もし、本書を信頼できると思った科学者の皆様は、本書をお役立て頂ければ幸いです。

そんな研究者の方が、早期にワクチン問題解決へ向けた成果を得るために、量子生態学の視点で考えられる検証や対策検討の手順を以下に記します。

検証の第一段階として、mRNAワクチンが体内のブラウン運動に影響している実態を、確認する必要があります。それは染色が関与しない、実体的な動きで確認する必要があります。方法のひとつとして、量子生態学による先に挙げた特許技術が使えらると思います。

未接種の人、接種して何ともない人、副反応が出ている人、それぞれの血液のブラウン運動の映像で確認しながら、一定人数以上の追跡データを得れば、傾向が掴めます。

ワクチンを追加接種しないのに、異常分子が継続して観られる場合は、体内でワクチンのmRNAが、その人の電磁気環境や人体のRNAの遺伝情報に影響を及ぼし続けている可能性があります。

併せて、それぞれの食生活や日用品に関する生活状況の詳細を聞き取り、人為的な合成分子の体内への侵入の様子を把握します。

頻りに摂取する食品や常に使用する日用品が含む合成分子の種類や内容が判明すれば、ワクチンによる影響リスク排除のため、消費者にそのような分子物の摂取をしないよう、注意喚起することができます。

コロナに感染して症状を発症した人としなかった人の体内環境の違いも、同じ調査で傾向を把握できると思います。こうして生活内容が明らかになれば、感染しない生活をするよう、指導に活かします。

次に、副反応を起こしている方々を対象に、症状ごとに体内の+電荷を確認し、それぞれを相殺できる何らかの-電荷が作用する物質を見つけます。これを対処薬品に反映するよう開発し、処方すれば解消できると考えます。

並行して、ブラウン運動を異常化する今までの生活状況を、一変する必要があります。

そして医学研究では、体内のブラウン運動と電磁気環境の関係性を解明し、データの蓄積が重要です。ここから、様々な病気の原因が解明できるはずで

医学以外、生物学も土壌学も気象も海洋も、様々な場のブラウン運動と電磁気環境、電磁気変化で起こるブラウン運動の変化を分析し、データを蓄積します。

量子生態学によれば、エネルギー把握、すなわち+の電荷状況と-の電荷状況と、電磁気による、相互作用のメカニズムの把握ができれば、様々な現象変化の原因を掴めると考えています。また現象変化の起因は電子移動ですから、解明の中心は電子移動で、解明や解析は、今までの科学研究より簡略化できると思います。

こうして得たデータをコンピューターに記憶させ、A Iによる解析ができるようにします。そうすれば地球上の様々な異常や変化について、電磁気変化後の変化予測が、とても簡単にできるようになるはずです。

例えば病気の場合、ひとりひとりの電磁気環境の情報を入力し、これに対応可能な副作用の電磁気環境を持つ成分の調合をA Iが計算すれば、副作用の無い医薬品をひとりひとりに応じ、個別に用意できるようになると思います。

他の産業でも技術開発の際に、環境への影響性を解析しやすくなるでしょうし、問題が起きても、自然環境に沿う作用機序をA Iに計算して貰えば、それに沿って技術を組み立てれば解決はスムーズになるでしょう。

そして、自然界のブラウン運動が持つ様々な場の電磁気環境が解明できれば、地球上の全ての現象も、簡単に解析できるようになります。

複雑で膨大な種類の分子構造を、ひとつひとつ特定する必要は無いと考えます。

自然界の現象変化は、+電荷、-電荷、電磁気、この3つの相互作用だけで起こり、生命に関してはブラウン運動の場が代謝を担っています。

これらのコントロール方法さえ開発できれば、全ての自然界に適用でき、地球が美しい地球であるために、人間社会はどうしたら良いかも、A Iがすぐに答えを出してくれると思います。

最後に、万能ワクチンの可能性について、ひとこと記します。

mRNAワクチンとして人体に有効なのは、正常なヘモグロビン由来の成分です。これをmRNAワクチンに応用すれば、様々な疾病に有効になる可能性があります。遺伝子前駆分子論の基に、哺乳類の構造情報を正しく持ち、人類種のDNAを重ね、正しい人体構造と健康を得るためには、正常なRNA情報を持つヘモグロビンの介在が必須だからです。

量子生態学が、何かの問題解決に役立てれば幸いです。

電子版・PDF 量子生態学/遺伝子前駆分子論によるmRNAワクチンレポート

発行日： 2023年10月18日（誤字訂正版）

著 者： 野上倫加（のがみみちか）

発行者： 株式会社ソウルリバースバンキング

電子版は無料でダウンロードできます

但し著作権は放棄していません

電子版を印刷したり、コピーを第三者へ配布できません

ダウンロードサイトアドレス

<http://www.nogami.co.jp/srb/rna.html>



印刷冊子版 ¥550-/冊（税込・送料別）

冊子版ご注文サイトアドレス

<https://shop.nogami.co.jp/items/79019712>



量子生態学テキスト

意識を持つ原子たちネクサス・A I が人間に変わる日

上記書籍ご案内サイト

<http://www.nogami.co.jp/srb/reference.html>



問い合わせ先

<https://thebase.com/inquiry/tengokuvege-base-shop>

